

---

# 特務捜査官ゲイル&サム～俺たちは英雄じゃない

五月雨拳人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

特務捜査官ゲイル&サムく俺たちは英雄じゃない

### 【Nコード】

N8222Y

### 【作者名】

五月雨拳人

### 【あらすじ】

ゲイルは宇宙連邦治安維持局の特務捜査官である。  
ピースキーカー

宇宙連邦治安維持局とは、宇宙連邦治安維持法に則り「個人で所有するには強力過ぎる知識、技術、能力またはそれによって産出された物」を取り締まる機関である。

ゲイルは今日も相棒のサポートメカ、サムとともに宇宙狭しと駆け巡る。

## 1 (前書き)

S F (少し不思議) とご了承くださいなければ幸いです。

鬱蒼とした森の中に、不自然な獣道がある。

踏み折られた草や、へし折られた木々が作る道が延々とまっすぐに伸びている。それはまるで、巨大な何かがただまっすぐ進みたいというだけで、草木の存在などに歯牙にもかけず進んだという感じだった。

大人二人が両手を伸ばしてやっと抱えられほどの木が、右や左に折られている。さらに太い樹木は、幹が折れる前に根が耐え切れずに根元から倒れている。

つまりこの獣道を作った何かは、木々をまるで草をかき分けるような容易さでなぎ払って行ったのだ。

どのようなものが通れば、こんな獣道ができるのだろう。どれだけ巨大で、そして強力なら、こんなにも無造作に森の中に道を作れるのだろうか。

地面には、何かとてつもない重量のものを引きずった跡が続いていた。

めきめきと音を立てて、木が倒れる。

幹に手を添え、軽く横に払うだけで木が倒れる。

ゲイルは、黙々と森林を開拓していく相棒　サムの広い背中をぼんやりと眺めていた。

三メートルの巨体を全身くまなく金属板で包んだサムの、直線的な凹凸のある背中が、ところどころ銀色の塗装が剥がれていた。ゲイルは、次は別の色にサムを塗ってみようかと考えるが他の色を塗ってもしっくりこない気がした。何よりこの無骨で実直な、脳味噌まで金属でできている相棒が、赤や黄色などの派手な色に染まっている姿はとても想像できなかった。

結局ゲイルはサムのカラーチェンジを諦め、塗装の剥がれた箇所

を線で繋いで絵を描く作業を脳内で始めた。

この森に入ってから何時間、ゲイルはサムの後ろを歩いているだろうか。サムがせつせと道を作ってくれるおかげで、彼は森を平地のように何の苦労もなく歩くことができる。照りつける陽射しは強いが木陰に入れば涼しいし、森特有の湿度の高さも気にならない。これなら宇宙戦闘服スーツの体温調節機能エアコンを切って、電池を節約できる。どう考えてもこの近辺に充電ができるような設備はないので、これはありがたいことだ。

だったら最初から歩きにくい森に入らず街道や平地を歩けばいいのだが、そもそもサムがどうしてこんな無益な森林伐採をしているかというと、ゲイルが原因であった。

「おい見ろよ。森だぜ森、むしろ森林？ あれ？ 森と森林ってどっちが強いんだ？ いや、そんな事はどうでもいい。こうなったらフイトンチッドとマイナスイオンを過剰吸引して、疲れた心と体を強制リフレッシュするしかねえ！」

森を見るや否や、ゲイルは意味不明な事を喚きながら意気揚々と中に入ってしまった。だが一時間ほどで「飽きた」だの「疲れた、腹減った」だの言い出して歩くのを放棄したのだ。

サムが来た道に戻ろうと提案すると、同じ道を歩くのをゲイルは嫌がった。

ではこのまま進むしかないと言うと、今度は歩きにくいから嫌だと首を振る。

ならおぶろうかと提案すると、恥ずかしいからやめると拒否をする。

地面に座り込み、不貞腐れるゲイル。子供のように駄々をこねる相棒に、サムの機械仕掛けの脳にノイズが走る。だがそのノイズはあまりにも日常的な出来事なので、サムにとってはエラーでも何でもない。相棒のわがままに対応するのは、彼にとってもはやプログラムされたルーチンワークと同じ事になっていた。

子育てに慣れた母親と同じ感覚とでも言っただろうか。サムはいつものように、ゲイルに問いかける。何が気に入らないのか。どうすればお気に召すのか。

ゲイルはあれこれと不平を並べ立てたが、簡潔にまとめると「木が邪魔で歩きにくい」という傍若無人なものだった。

サムはゲイルをなだめすかして先を急ごうと促すが、彼は頑として動かず、拳句の果てには「道がないなら作ればいいじゃないか」などと、是正ない子供か頭の悪い貴族のような事を言い出した。サムが無益な環境破壊だと諭したが、一向に聞き入れない。一度駄々をこねたらテコでも動かないだろう。

そしてサムはこのままでは任務に支障が出ると判断し、わがままな相棒のために仕方なく実行に移した。手で草木を払い、足で土を平らに踏み固める。一トンもの体重で踏み固めれた地面は、舗装されたように歩きやすく、どんどん視界が開けていく森の姿に、ゲイルの機嫌はようやく直ったかに見えた。

だがそれも長く続かず、今ゲイルの興味はサムの背中 of 塗装が剥げた部分に注がれているのであった。

振り返る事も手を休める事もなく、サムがゲイルに問いかける。

「ゲイル、気がついていますか？」

「はあ？」

いきなり声をかけられたので、ゲイルは意味が解からず素っ頓狂な声を上げた。

「気づいたかって、何にだよ？」

「我々がこの森に入ってから、まだ一匹も生物を目撃していません」

「お前がバキバキ木をへし折ってるから、ビビって隠れているだけじゃねーのか？」

「確かにその可能性はあります。けれどこれだけ木を倒して、鳥の一羽も羽ばたかないのはいささか不自然ではないでしょうか？」

言われてみれば確かにそうだ。普通森の中でこれだけ木を倒せば、鳥たちが喚きながら飛び立って逃げるだろう。小動物が怯えて隠れているのは当然だとしても、大型の獣がこの広大な森で一匹も発見できないのは明らかに不自然だ。

それにサムは、闇雲に木を倒していたわけではない。進行方向に複数のスキャンをかけ、小動物や鳥が隠れていないか、巣がないかと吟味した木だけを倒していたのだ。もちろん木を倒す方向も計算している。

「妙だな……。まさか俺たちのせいで、みんな逃げ出したんじゃないかねえだろうな？」

「いいえ、そうではありません」

「どういう事だ？」

「この森にはすでに、我々よりも厄介なモノが存在しているようです」

サムが巨木をなぎ倒すと、視界が一気に開けた。

二人は、森を抜けたと見間違う場所に出た。

だがすぐにそれは違うと理解できたのは、目の前の光景が自分たちの背後と同じだったからだ。

へし折られた木々。踏み折られた草に固められた地面。サムがゲイルのために作った道と、同じ景色が広がっていた。

違う点があるとすれば、それは木々がでたらめな方向に倒れていることだ。例えるなら、邪魔だから無造作に払ったとでもいう感じだ。中には圧倒的な質量で押し潰されたような形跡もある。

この道の創造主は、ただ自分が進みたい方向に木があったから倒したのだろう。まるで草をかき分ける感覚で。

道は森の南から北上し、西に向けて折れ曲がっている。西に方向転換する角の部分に、二人が東から来た道がぶつかったのだ。

「おいおい、この森にはお前のオヤジが住んでるのか？」

ゲイルがサムの前に出て、森の中にぼっかりと開いたトンネルの

中に立つ。道の幅は、サムが作った道の倍以上あった。

「倒れている木の断面がまだ新しいですね。鉢合わせしなくて幸運でした」

「だな。こんな小山のようなバケモンの相手なんて、頼まれたってしたくねえぜ」

ゲイルは倒れた樹木をぺちぺちと叩きながら軽口を叩くが、いつものキレがなかった。木には恐竜が引つ掻いたような爪跡が四本走っており、幹の太さはサムの胴体よりもさらに二周りは太い。

「まだこの近くにいますよね。遭遇すると面倒なので、もう少し時間をおいてから」

「どうした？」

言葉を途中で止めたサムに、ゲイルが声をかける。だがすぐに彼が自分には感知できない何かを察知していると判断し、様子を窺う。ゲイルには何も聞こえなかったが、サムの聴覚はゲイルとはできが違うのだ。

「ゲイル、悲鳴です」

「何だ……そんな事かよ。それで？」

あっさりとゲイルは聞き流し、少しの間沈黙が流れる。その間サムはじつとゲイルを見ていた。

「な、何だよその目は……？」

「いえ、助けに行かないのかな、と」

またサムの悪い癖が始まった、とゲイルは思った。いつもの事ながら、相棒の人の良さにはほとほと呆れる。どうしてこのむくつき金属の塊は、やたらと余計なお節介をしたがるのだろうか。自分たちには、余計な事に首を突っ込んでいる暇などないというのに。

「どうせ原住民のガキだろ？ ほっとけほっとけ」

小指で耳をほじりながらゲイルは言う。だがサムもなかなか強情で、一歩も引かなかった。

「どうして貴方は、いつもそう薄情なのです。少しは困っている人を助けようとは思わないのですか？」



「思わないね。知ってるか？ 情けは人の為ならずと言って、無闇に手助けをすると、そいつのためにならないんだよ」

「それは誤った解釈のほうです。正しくは、人に情けをかけると結局は自分を助ける事に繋がるという意味です。貴方こそ、因果応報という言葉を知っていますか？」

「し、知ってるよ、銀河万丈くらい……」

「まったく全然違います。耳と脳は大丈夫ですか？」

「うるせえっ！ 御託ばっか並べやがって。ちよっと辞書が丸々頭に入ってるからって、調子に乗るんじゃないぞ！」

間違いを指摘されて逆ギレするゲイルに、サムはさらに追い討ちをかける。

「ははあ、さては怖いんですね？ そうならそうと、素直に言ったらどうですか？ いいですよ、怖いなら無理に助けに行かなくても」

「何だこの野郎。上等だ、行ってやるうじゃねえか！ 悲鳴がしたのはどつちだ!？」

「三時の方向です。距離は」

「こつちか！」

サムが言い終わるよりも早く、ゲイルは竜巻が通った後のような森のトンネルを疾走していた。

「まったく、いつもながら手のかかる……」

すでに見えなくなったゲイルの背中に向けて、サムが小さく声を漏らす。鉄仮面のような顔から表情は読み取れないが、どこことなく微笑しているように見えた。

「いや、いや……来ないで！」

サーシャはくせのある長い赤毛を振り乱しながら、必死で石を投げる。だが腰が抜けて尻餅をついた状態で投げた石は、見当違いの方向に飛ぶか、届かずに虚しく地面に落ちる。

「この！ この！ あっち行け！」

後退りながら、サーシャは死に物狂いで石を投げる。石と一緒にむしった草が、少女の眼前で舞った。

少女の前では、昆虫の幼虫に無理矢理人間の上半身と蟻の頭部を繋ぎ合わせたような巨大な生物が、地響きのような唸り声を上げている。

緑色のぶよぶよとした虫の腹に、小石が虚しく弾かれた。蟻に似た顔面の顎から、じゆるじゆると粘液が涎のごとく垂れる。それが食欲を連想させ、サーシャの恐怖を増幅させた。

後退する少女の背が硬いものに当たる。慌てて振り返ると、土の壁が彼女の逃げ道を塞いでいた。

見上げるほどの崖は、腰を抜かした少女の力ではとてもではないが登れるものではないだろう。それに登っている間に絶対捕まってしまう。完全に退路を絶たれ、絶望と恐怖で涙が溢れそうになる。

「誰か……誰か助けてええええええっ！」

森にサーシャの絶叫が木霊する。叫んでも無駄な事は充分解かっている。この森には、城の屈強な兵士ですら恐れて入って来ないのだ。だがそれでも、自我を保つために本能が喉を振るわせる。そうしないと精神が壊れてしまいそうだった。

木霊が小さくなるにつれ、サーシャの絶望が大きくなる。

食べられる　そう思った時、サーシャの耳に信じられない声が届いた。

「うおおおおおおおおおおおおおっ！」

サーシャの叫びに応えるかのように、誰かの叫びが徐々に近づいて来る。

その声は一秒ごとに大きく、そして近くなる。視界を蟻頭に塞がれているが、誰かがこちらにももの凄い速さでやって来るのが感じられた。

背後からの咆哮に、蟻頭がゆっくりと振り向く。巨大な腹が蠕動しながら移動すると、サーシャの視界が僅かに開け、ほんの一瞬だが誰かがこちらに駆けてくるのが見えた。

誰かが助けに来てくれた。

絶望に支配されかけた少女の心に、一筋の希望の光が射す。それは太陽の光のように、とても明るくて温かい。

サーシャは、幼い頃母から聞いた昔話を思い出した。

絶体絶命のピンチに現れる、勇者の物語を。

「うおおおおおおおおおおおっ！」  
疾走しながらゲイルが吼える。

ゲイルが駆け抜けた跡は、耕したかのように地面が抉れていた。

速い。あれほど歩きにくいと愚痴をこぼしていた森を、矢のように駆け抜ける。

緑の巨大な物体を視界に捉えた。見るからにおぞましく、そして大きい。あれならこの森に生えている木々など、何の障害物にもならないだろう。

だがそんな事はどうでもいい。それよりも、絹を裂くような悲鳴と一瞬だけ緑の塊の後ろに見えた赤毛が、ゲイルのテンションを一気に上げた。

さらに速度を上げる。

蟻の頭がゲイルに向き直り、突然湧いて出た邪魔者に敵意を剥き出しにする。ゲイルは構わず一直線に蟻頭へと突進した。

下半身がイモムシ状なだけに、蟻頭の方角転換は遅い。ぶよぶよした腹が波打ち、見る者の生理的嫌悪感を刺激する。だが腰から上

の人間に近い上半身は、下半身に似合わず機敏な反応を示す。

強引に体を捻り、蟻頭は近くにあった木々を後ろ手で払う。腕のほんの一振りです、数本の大木がゲイルに向かって飛んだ。

突然襲いかかる大木の弾幕。だがゲイルは止まることも避ける事もせず、まるで飛んでくる巨木など目に入らないかのようにただ真っ直ぐ蟻頭へと駆ける。

回避行動すらしめないゲイルに、一本の木が直撃コースで飛来する。当たれば常人なら即死間違いなし。だがゲイルは右手を振りかぶると、木の幹に手刀を一閃した。

「ゲイルチョップ！」

ただの手刀。ただのチョップ。たったそれだけの一撃で、巨木が真っ二つに割れてゲイルの後方へと吹っ飛んだ。

ゲイルの走る速度はまったく衰えず、蟻頭がようやく重たい体を引きずるように反転した時にはすでに懐に入っていた。

「遅いんだよ、デカブツが！」

ゲイルは左足を地面に突き刺す勢いで踏み込み、体を回転させる。突進の勢いをそのまま乗せ、強烈な右の回し蹴りを放った。

ずどん、と蟻頭の腹が大きく凹み、巨体が横にずり動く。だがゲイルの足は、すぐに押し返されてしまった。

予想外の弾力に、ゲイルはバランスを崩す。だが何とか持ち直し、蟻頭の腹に蹴りの連打を浴びせた。

爆撃の連続音が森に響くが、ゲイルの足には分厚い水風船を蹴ったような感触が伝わっただけだった。

「クソ、効いてねえ」

ゲイルが顔を上げて蟻頭を見るが、ダメージがあるようにはまったく見えない。無論蟻頭の顔面に表情があればの話だが。

腹を攻撃するのを諦めようとした時、頭上から蟻頭の腕が襲いかかって来た。

「うおっ……！」

鋭い爪を持った豪腕が、次々とゲイルを襲う。イモムシの下半身

と違い、蟻頭の腕は移動速度の千倍は速かった。

矢継ぎ早に繰り出される蟻頭の攻撃を、ゲイルは右に左に飛び跳ねてかわす。巨大な腕が空振りするたびに、地面が深く掘られた。

「へっ、遅い遅い。遅すぎて目をつむってもかわせるぜ」

余裕綽々のゲイルは本当に目を閉じる。それでも蟻頭の攻撃は、ゲイルには当たらなかった。

だが

「あら？」

目を閉じて飛び跳ねていたため、ゲイルは蟻頭が掘った窪みに足をとられた。

無様に地面に仰向けに倒れるゲイル。その隙を逃さず、蟻頭の腕がゲイルに伸びる。

強烈な平手打ちが、大量の土砂を撒き上がらせた。激しい土煙が起こり、少女は慌ててバスケットを庇うように覆い被さる。

辺りに充満していた土煙がようやく治まると、サーシャはゆつくりと体を起こした。体中に土を被っていたが、幸いどこにもケガはない。口の中の砂を吐き出し、髪に積もった土を手で払い落とす。バスケットの中身も、彼女が身を呈して守ったお陰で無事だった。

ほっと胸を撫で下ろすが、今はそれどころではない。蟻頭はまだ自分の目の前に居るのだ。だが怪物は自分の事など気にもかけず、背中を向けてじっとしている。

これはチャンスだ。そう確信したサーシャは、勇気を振り絞って蟻頭の横をそっと通り抜ける。怪物は何かに夢中になっているようで、地面を這い進む少女にはまったく気がつかなかった。

そういえば、助けに来てくれた（と彼女が勝手に信じている）勇者様の姿がなかった。まさか颯爽と駆けつけたはいいが、怪物に恐れをなして逃げ帰ってしまったのだろうか。

いや、そんな事があるわけがない。何しろ勇者様なのだ。こんな虫っぽい怪物を恐れるなんて事はないはずだ。

だが　ちらりとサーシャは自分の家よりも大きな蟻頭を見上げる。まず目についたのは、グロテスクな下半身だ。その上に人の体と蟻の頭を据えるなんて、子供でもこんな奇抜なデザインは思いつかない。確かにこんな巨大な怪物と闘えと言われたら、どんな勇猛な戦士でも二の足を踏むだろう。

得も言えぬ不安に襲われたサーシャは、とにかくここから離れようと必死に地面を這う。大事なバスケットを頭に乗せて両手で支え、懸命に足を動かした。

這い進むにつれ、蟻頭の腹で隠れていた景色が露になる。ふと見ると、蟻頭の手から何かはみ出しているのを見つけた。

よく見るとそれは、蟻頭の手押し潰されたゲイルであった。

「あ……………」

助けに来たはずの勇者が、まさかの返り討ちに遭っている。

あまりにショッキングな光景に、サーシャの手からバスケットが落ちる。そして少女の意識は闇に吸い込まれた。

蟻頭の指の隙間から覗くゲイルの体は、びっくりとも動かない。巨木を簡単になぎ倒す蟻頭の豪腕を受ければ、圧死は必然であろう。むしろゲイルと解かる形を残しているのが奇跡だ。

獲物を完全に仕留めたと確信したのか、蟻頭が嬉しそうに顎をガチガチと鳴らす。表情を持たない蟻の顔が、まるで笑っているように見えた。

だが次の瞬間、蟻頭が苦痛の声を上げる。見れば、蟻頭の指をゲイルが両腕で締め上げていた。

「いてえじゃねえか、この……………この……………えっと、半分以上虫だから、この虫野郎」

ゲイルは両足を蟻頭の指に絡ませ、さらに締め上げる力を強める。ぎりぎり一指が軋み、怪物は悲鳴に似た鳴き声を上げた。

指を襲う激痛に、蟻頭は堪らず手を激しく振ってゲイルを振り払おうとする。だががっしりと指にしがみついたゲイルは、振り回さ

れながらも執拗に蟻頭の指を締め付けた。

「オラあつ！」

気合いとともに、ゲイルは蟻頭の丸太のような指をへし折り、そのまま力任せに引きちぎる。

蟻頭の絶叫が一際大きくなる。ゲイルは怪物の指を引きちぎった反動を利用して跳躍した。

地面に降り立ったゲイルは、抱えていた怪物の指を放り捨てた。どさりと地面に落ちた指は、濃い緑色の体液を撒き散らしながらのた打ち回る。蟻頭も激痛のあまり暴れていた。

「マジであつたま来たぜこの野郎。虫らしく踏み潰してやるから覚悟しろ！」

蟻頭に向けて指をさすと、ゲイルは両足を開き腰を落とす。ゆっくり肺と腹の中の空気を全て絞り出すと、大きく深く息を吸う。

「我 最強なり」

ゲイルの発した言葉キワードによって体内の内燃気環ソウルジェネレーターが発動し、全身の筋肉が制限から解放される。戒めを解かれた肉体が歓喜の声を上げ、その高揚感がゲイルの闘争心をさらにかき立てる。

「行くぜっ！」

低くしゃがみ込んだゲイルは、全身のバネを最大限に溜める。地面を穴が開くほどの力で蹴り、音速に近い速度で空へと舞い上がった。

数秒で森を見渡せるほどの上空に到達する。下を見ると、蟻頭の姿が豆粒ほどに見えた。

体が重力に捕らえられ、上昇が止まる。

「体がダメなら頭を潰せばいいって、昔から決まってるだよ」  
雲に手が触れる上空で、ゲイルはにやりと笑う。

自由落下が始まり、ゲイルの体が下に引っ張られる。それと同時に右足を高く振り上げて、自分の体を縦に連続回転させた。

高度が下がるにつれ、落下速度と回転速度が上がり、ゲイルは車輪のように大気を切り裂きながらまっ逆さまに落ちた。

「くらえ！ 必殺、超重力踵落とし《グラビトンボマー》！」  
遠心力で加速した踵が、落下速度をプラスされて蟻頭の頭頂部に炸裂する。

轟音が生まれ、蟻頭の首が衝撃に耐え切れずに体にめり込む。完全に頭が沈み込んでも勢いは止まらず、上半身がめきめきと虫の腹に飲み込まれ、蟻頭は縦に押し潰されていく。強制的に押し込まれた上半身に圧迫され、虫の腹が破れ体液が噴出した。

大気との摩擦で、全身から煙を立ち上げたゲイルが足を離す。地面に着地して見上げると、蟻頭の体長は半分以下になっていた。

すっかり体積の小さくなった蟻頭の腹を、ゲイルが爪先で軽く蹴る。だが蟻頭は脈動しながら体液を垂れ流すだけで動かなかつた。

蟻頭が完全に沈黙した事を確認し、ゲイルは「フン」と鼻を鳴らす。

「虫ごときが俺に勝とうなんて、百億万年早いぜ」

「そのわりには苦戦していたようですが？」

「うおっ、びっくりした！」

いきなり背後に現れたサムに、ゲイルはびくつと体を震わせる。

「何だよサム、今頃追いついたのか？ 相変わらずドン亀だな、

お前は」

「私は重力下では、本来の機動性を発揮できませんからね。それ

と」

「あ……」

サムが両手に抱えている少女を見せると、ゲイルは忘れていた大事な何かを思い出したような顔をする。

「誰かさんが目的を忘れて派手に暴れまわっているので、私が保護しておきました」

サムの皮肉に、ゲイルが「ぐ……」と唸る。蟻頭に叩きつけられた事で頭に血が上り、今の今まですっかり少女の事を忘れていたのだ。



ゲイルは少女の顔を覗き込む。気を失っているのか、サムの手の中でぐったりとしていた。

「おい、動かねえぞ。まさか死んでるのか？」

「いいえ。気を失っているだけです」

「そうか……」

ほっと息をつくゲイル。注意して見れば、少女のささやかな胸が小さく上下している。特に目立った外傷はなさそうなので、本当にただ気絶しているだけなのだろう。

少女が無事なのを確認すると、やおらゲイルは溜め息をついて肩を落とした。手を頭の後ろに組み、わざとらしくがっかりしたポーズをとる。

「どうしました？」

「しかしうつすい胸だな。こいつ本当に女か？　ったく、参ったな……」

「まだ少女と呼んだほうがよい年齢のようですが、それが何か？」

「いや、どうせ助けるなら巨乳の美女が良かったなあと思ってな」

「はあ……」とサムが呆れる。鉄仮面の通気孔から、溜め息に似た排気が漏れる。

「こんなツルペタを助けるために苦労したなんて、とんだ無駄骨だぜ。俺は胸がメロン大以下の奴は、女と認めないポリシーを持っている事に定評があるんだ。知ってるだろ？」

両手を胸の前で動かして豊満な胸をジェスチャーするゲイル。サムは奇妙な動きをする相棒を、文字通り無機質な目で見ていた。

わずかな沈黙の後、サムは少女をそっと木陰に横たえた。そして蟻頭の死骸に近づき、しげしげと眺める。

「この生物……奇妙ですね」

「無視か？　俺の話はスルーか？」

「え？　ああ、すみません。よく聞こえませんでした」

「お前はその気になれば、一キロ先で落とした針の音でも聞こえ

るだろ。それとも何か？ 俺の声は、お前のセンサーでも感知できない特殊な音波なのか？」

唾を飛ばして喚く相棒をよそに、サムは蟻頭の腹の表面を左手でなでる。

突然サムの右手の甲から剣が飛び出し、一秒間に一万回振動する超振動ブレードの刃が低い唸りを上げる。

左手で当たりをつけた箇所、ブレードの刃が突き刺さる。ゲイルの渾身の蹴りですら破れなかった体皮に、刃はあっさり飲み込まれた。そのまま刃で円を描き蟻頭の腹をくり貫くと、躊躇なく腕を突っ込み何かを掴み出した。

「ゲイル、これを見てください」

「全部無視かよ!？」

目の前に突き出されたサムの手を、ゲイルが叩く。粘液のついた握り拳がぬちゃりと音を立てて開かれると、ゲイルの顔が徐々に真剣になる。サムの掌には虹色に淡く輝く、クリスタルに似た物体が乗っていた。

「これは……」

「科学的に圧縮されたエネルギーの塊です」

「と言うと、この化け物は人工的に作られたものだって事か」  
当たり前だな、とゲイルはにやりと笑う。

「この惑星には絶対ありえない物質ですからね。間違いないでしょう。恐らくこの物体は、怪物の構築及び原動力として機能している核のようなものです。ただエネルギーの圧縮率が異常で、これ一つでも小さな発電所程度のエネルギーを有しています」

そうか、とゲイルは頷く。クリスタルは仄かに明滅を繰り返し、ゲイルの顔を照らしている。蟻頭の命の源であったクリスタルの光はとても美しく、そして儂かった。

二人がクリスタルを眺めていると、乾いた音を立てて、蟻頭の死骸に亀裂が入った。巨体が形を失っていく。地面に落ちた破片はさらに細かく崩れ、砂となって風に舞った。

「核を抜いたため、肉体が崩壊を起こしているようですな」

「所詮は仮初の命ってやつだ。命を与えられた操り人形も、電池が切れればただのガラクタに逆戻りか……」

無言になるサムに、ゲイルは「悪い。忘れる」とぼつが悪そうに言った。

二人はしばらくの間、崩れ行く蟻頭の姿を黙って見守った。

蟻頭は、五分ほどで完全に砂の山に変わった。砂山もいずれ風に飛ばされてなくなるだろう。残ったのは、ゲイルの拳ほどの大きさのクリスタルだけ。サムは、掌でぼんやりと光るクリスタルと砂山を交互に見た。

「感傷か？ お前にしてはセンチメンタルだな」

そう言うとゲイルは、サムの手からクリスタルを取り上げた。クリスタルにまわりついて蟻頭の体液を、顔をしかめながらズボンの尻で拭く。

「いいえ、そういうわけでは……」

「くだらない事を考えている暇があったら、とっととコイツのデータをキャサリンに回せ。恐らく今回の標的ターゲットに繋がる鍵だからな」

「了解しました」

サムの両目が赤く光り、ゲイルの掌に置かれたクリスタルをスキヤンする。データを採取すると、衛星軌道上で待機している宇宙船のメインコンピュータ『キャサリン』に転送した。

サムからの転送データを受信したキャサリンは、すぐさま惑星全体のサーチを開始した。

「サーチ開始しました」

サムの報告を受けると、ゲイルは持っていたクリスタルを無造作に腰のポーチに突っ込んだ。あまりの自然な動作に、さすがのサムも思わず見逃してしまうところだった。

「ちょ……もう少し丁寧に扱ってください。もしそれが爆発したら、いくら貴方でも無事では済みませんよ」

「まったく心配性だな……お前は俺の母親か？」

「そういう問題ではありません」

「いちいち細かい事を気にしているとハゲるぞ」

「元から髪なんて生えてませんよ」

「ははっ、そうだったな」

サムは上手く話を反らされた事に気がついたが、ゲイルが楽しそうに笑っているのを見てそれ以上何も言わなかった。

「それじゃあ獲物の巣穴が見つかるまで、どこかで待機するか。」

無闇に歩き回っても、腹が減るだけだからな」

大きく伸びをすると、ゲイルの腹が鳴る。そしてそれに呼応するように、少女が小さな声を上げた。

「う、ん……」

サーシャは小さく呻くと、ゆっくりと目を開けた。

木の枝が風にそよぎ、木漏れ日が顔に注ぐ。太陽の光が目に入り、思わずぎゅっと目をつむる。

自分はどうしてこんなところに寝ていたのだろうか。目を閉じたまま、事の顛末を思い返してみる。背中に感じる草の感触が、妙に心地良かった。

こうして草むらに寝転んでいると、木陰で昼寝をしていただけのように思える。時折吹く風が肌を優しく撫で、赤い前髪を揺らした。昼寝にはもってこいの日だったが、果たしてそのために自分は森にまでやって来たのだろうか。

まどろみの中で混乱した頭を整理していると、木々のざわめきに混じって聞き慣れない声が聞こえてきた。

「それより腹が減ったな。何か食い物持ってないか？」

「もう全部食べたのですか？」

「育ち盛りだからな。あれっぽちじや足りねえよ」

「これ以上育つわけないでしょう……。食料といいさっきの戦闘といい、少しは計画性というものを身につけてくださいよ」

「ったく口うるせえな。お前は俺の女房か？」

「そういう問題ではありません」

「あれ？ この会話、前にしたっけ？」

「気のせいですよ。それより、その手に持っているものは？」

「これか？ さっきそこで拾った」

「それはあの少女の所持品でしょ。勝手に触ると怒られますよ？」

「バスケットと言えば、中身は食い物に決まってる。助けてやった謝礼代わりに、ちよっとくらいつまんでも罰は当たらないだろ」

バスケットという単語を聞いて、サーシャの目が大きく開かれる。

そういえば、自分はバスケットを持っていたはずだ。そしてあれには、大事なものが入っているのだ。

慌てて起き上がる。声のした方向へ顔を向けると、奇妙な二人組みが座り込み、バスケットの中を覗き込んでいた。

「なんだこりゃ。草しか入ってねえぞ……」

「あてが外れて残念でしたね」

「まあ意外と美味いのかもれないし、とりあえず食ってみるか」

「そこで躊躇なく食べる、という選択肢を選ぶ神経は尊敬に値しますよ」

「あまり褒めるなよ。照れるぜ」

「褒めてませんよ。せめて火を通して食べないと、消化に悪いですよ」

「サラダだって生で食うだろ。それに火なんか通したらビタミンが破壊されちまう」

サーシャが愕然としている間に、男がバスケットの中から草をひと束掴み、ゆっくりと口に運ぼうとした。サーシャは慌てて駆け出す。

「だ、ダメ。待って！」

「おや、気がついたようですね」

「なんか凄い形相でこっちに走ってくるぞ？」

必死で走るサーシャに向けて、男が笑顔で手を振る。その手には、彼女が命がけで森に採りに来た薬草が握られていた。

「おい貧乳、これ食っていいか？」

「誰が貧乳よっ！」

「がつ……！」

見ず知らずの男に自分が最も気にしている事を言われ、反射的に体が動いた。座り込んでいる男の顔に、サーシャの低い飛び蹴りが炸裂する。男は見事な後ろ回りで地面を転がって行き、木にぶち当たってようやく止まった。

「あ……」と大きな鎧を着たもう一人が、木の根元でひっくり返

っている男を見て呆然とする。

サーシャは落ちたバスケットを拾い上げると、散らばった薬草をせつせと中に詰め込んだ。

「あの、お嬢さん……？」

「何よ、何か文句ある？」

背後から恐る恐る声をかける鎧を、サーシャはぎろりと睨む。普段なら、自分の倍くらいある身の丈の鎧男に向かってこんな啖呵は切らないのだが、先の一言で完全にスイッチが入ってしまい恐怖も何も感じなかった。それ以前に、こんな巨大な鎧を着た大男が存在するわけがないという疑問すら湧かなかった。

「いえいえ滅相もない。それよりも、相棒の失礼をお詫びします。あれは昔から粗忽な男で、私も普段から手を焼いて困っていたのです。今回の事は、彼にとって良い教訓になるでしょう」

そう言うで大鎧は、よくやったとばかりに親指を立てる。見た目を裏切る紳士的な態度に、サーシャはすっかり毒気を抜かれてしまい、煮えたぎった頭がすうっと冷めていく。

「そ、そう……、それならいいわ……」

冷静になってみれば、恐らく彼らが蟻頭から自分を助けてくれたのだろう。命の恩人に蹴りを入れてしまったと今さらながら気づいても、済んでしまった事はどうしようもない。サーシャは謝るのと礼を言うタイミングを一度に失ってしまった。

「時にお嬢さん」

「サーシャ」

「え？」

「あたしの名前。サーシャでいいわ」

「了解しました、サーシャ。私の事はサムとお呼びください」

それと　とサムは木の下でまだ伸びている男を見て、

「あちらの不躰で無作法で無礼な男がゲイル。私の相棒です」と紹介した。

なだらかな平地を、サーシャはゲイルとサムを連れて西に歩いていた。彼女の案内で森を北に抜け、街道まで出てきたのである。

ちらりとサーシャは後ろを盗み見る。背後では、ゲイルが不貞腐れたように手を頭の後ろで組んでぶつくさと歩いている。蟻頭にぺしゃんこにされたように見えたが、ぴんぴんしている。きつとあれは自分の見間違いだっただろうと、サーシャは納得しておいた。

ゲイルは見れば見るほど奇妙な男だった。薄い茶色の髪はぼさぼさで、目つきがやたら悪い。歳は自分よりも少し上だろうか。体格は細身だが痩せっぽちではなく、筋肉質で締まった印象を与える。

何より目を引くのはその服装だった。体にぴったりとした、首から下は爪先から手の指まで繋がった服。ゲイルの体に合わせてあつらえて、動きやすさだけを追求したようなデザインだ。だがその素材が何なのかは、見ただけではまったく判らない。もしかしたら町ではこういう服が流行っているのかもしれないが、サーシャの趣味ではなかった。

ゲイルの服にはあちこちに焼け焦げたような跡があり、火事場泥棒をしてきた直後の盗賊をイメージさせる。恐らく十人がゲイルを見たら、八人は自分と同じ感想を持つだろう。

最後尾を黙々と歩くサムも、奇妙という点ではゲイルを上回っていた。

まず何より大きい。村で一番大きな男でさえ、彼に比べたら大人と子供だ。ゲイルだって小柄ではないが、サムの中にすっぽり納まってもまだ余裕があるだろう。いったい鎧の中にどんな人が入っているのか気になるところだが、見ないほうが良いという気がしないでもない。

鎧のデザインも奇抜だった。田舎育ちなのでこれまで数えるほどしか見た事ないが、城の兵隊や騎士のものとはまるで違う。だが彼の物腰や口調は、ゲイルと違って上品だ。もしかしたらどこか名家の騎士なのだろうか。それにどちらかと言うと、サムは鎧は戦うための実用品ではなく、装飾や儀礼用のものに見える。だとしたら、



サムが主人でゲイルが従者だろうとサーシャは勝手に設定を決めた。だが冷静になって二人を観察すると、なんと胡散臭い連中だろう。命を助けてもらった負い目からつい家に招待してしまったが、早まった事をしたのかもしれない。そうサーシャは後悔したが、もう後には引けなかった。

「おい、まだ着かないのかよ?」

後ろからゲイルが訊ねてくる。少し歩きたびに同じ質問をするので、サーシャは小さな子供の母親になったような気分だった。

「うるさいわね、もうちょっとだから黙って歩きなさいよ」

「さつきからそればつかじゃねえか。俺、ハラ減って死にそうなんだけど」

「お腹が空いたくらいで死にはしないわよ」

「いや死ぬよ。餓死だよ餓死」

「ああもう、男のくせにグダグダ文句ばかり。少しはサムを見習いなさいよ!」

「俺はあいつと違ってデリケートなの。歩けば疲れるし、動けば腹が減るんだよ」

何を当たり前の事を言っているのだろう、とサーシャは思った。軽装のゲイルがそんなに疲れているなら、サムはどうなる。あんなに大きくて重そうな鎧を着ているのだから、疲労はゲイルとは比べ物にならないはずだ。それでもサムは文句一つ言わない。ゲイルはサムを少しは見習うべきだ。特に彼の紳士的な態度を。

「ほら、あそこに火山が見えるでしょ。あの山の近くだから、もう少し辛抱して歩きなさい」

サーシャが南を指差すと、山頂から黒い煙をくゆらせている火山があった。山の周辺だけ煙の影響なのか、暗雲が立ち込めてやけに暗い。麓は荒地と化しており、目に見えるのは岩と赤茶けた土ばかり。山へ続く道も荒涼として、近づくにつれて草木がまばらになって殺伐としていく。ついさっきまで生命力溢れる森を歩いていただけに、あまりの殺風景さに薄ら寒くなってくる。

「ではあの火山を越えて行くのですか？」

「次は山越えかよ……」

「ううん、あの山には近づいちゃいけないの。だから遠回りだけど、迂回して村に向かうわ」

「近づいてはいけないとは、どういう事ですか？」

「あの山はね、この辺りの守り神なの。神様が住んでる神聖な山だから、誰も近づいちゃいけないってずっと言われてたわ。もっとも、火山だったのは大昔の話だったみたいだけどね」

「しかし、今あの山は火山活動をしているように見えますが」

「十年前、あたしがまだ小さかった頃、急に活動を再開したの。噴火こそしなかったけど、大きな地震があつてみんなが大騒ぎしてたのを覚えてるわ。神様の怒りだとか祟りだとか言つてね」

「神様ねえ……。胡散臭い話だ」

「けど、あの地震があつてからなの。麓や森に怪物が出没したのが。だからますます誰も近寄らないようになったわ」

「怪物はあの一匹だけではないのですか？」

「あんなに大きいのは珍しいけど、うじゃうじゃ居るわよ」

「危険な土地ですね。軍隊などが討伐してくれないのですか？」

ゲイルの言葉に、サーシャの表情が曇る。辛い過去を思い出して、唇をきゅつと噛んだ。

「何度も軍隊が出陣したわ。けど相手が悪すぎ。全部こてんぱんにやられて逃げ帰ったわ」

「そりゃここの軍隊ごときじゃ、あの化け物に手も足もでねえだろうよ」

ゲイルがからから笑っていると、サーシャは「その中にあたしの父さんも居たの」と、は小さな声で言った。その途端ゲイルの笑いが止まる。

「す、すまん……」

「いいのよ、本当の事だし。けど偉い人は名誉とか誇りだとかのほうが大事で、あたしたち平民の命なんて何とも思つてないんだわ」

あんな怪物に勝てるわけないのにね」

俯くサーシャに、ゲイルとサムは言葉を失う。かける言葉が見つからないという感じだ。サーシャも何も言つて欲しくなかった。気休めや慰めをかけられたところで、彼女の父が帰つて来るわけではないのだから。

「あたしの村は森にも山にも近いから、よく怪物の討伐に巻き込まれたわ。男の人は連れて行かれて、女の人は無理矢理働かされたけど王様ももう懲りたみたいね。もう随分前から兵隊も徴兵も来なくなつたわ」

「恐らく、国がそれだけ疲弊しているのでしょう」

「フン。馬鹿が政治をやると、ろくな事になりやしねえ。だが政治をやつてる奴に限つて馬鹿だから始末に負えねえな」

そうね、とサーシャは小さく微笑んだ。だがその笑みは諦めと悲しみを含んでいて、どこか寂しそつだった。

「ところでよお」

「なあに？」

「俺、ハラ減つて死にそうなんだけど、その草食つていいか？」

「だ〜から、これは大事な薬草なの。村に帰つたらご馳走してあげるつて、さっき言つたじゃない！」

「そつだつけ？」

「馬鹿じゃないの？ あんた馬鹿じゃないの？」

「お前、二回言つたな。この貧乳貧乳貧乳！」

「バーカバーカバーカバーカ！」

子供のように口ゲンカする二人を、サムは黙つて見守る。つと顔を上げると、火山が目に入った。黒い雲がかかった火山は、静かに火口から煙を昇らせ、そこには神よりも悪魔が住んでいるように見えた。

太陽が山の陰に隠れようとする頃、ようやくゲイルたちはサーシヤの村に到着した。

村は太い丸太で作った柵で囲われ、門の内側の両脇には見張り櫓が一棟建てられていた。

門には村の若い男が二人立っており、それぞれの手に武器を握り締めている。農具を改造したようなそれは、あまりに貧弱で頼りなく、ほとんど気休めといった感が拭えなかった。

門の前に立っていた大柄な青年がサーシヤの姿を認めると、笑顔で手を振ってきた。だがすぐに、彼女の後ろを歩いているゲイルとサムに気づいて表情を引き締める。

青年はサーシヤに駆け寄ると、まるで悪党から助け出すように手を引いてゲイルたちから離れた。

「ちょっとグレン、何するのよ。痛いじゃない」

「それよりどこに行ってたんだ？　あまり心配させるなよ」

「別にあんたに心配して欲しくないわよ。ちょっとおじいちゃんのために、森に薬草を採りに行ってただけ」

「森ってお前、あの森は怪物が出るから危ないって散々言われているだろ」

「だって、おじいちゃんの病気に効く薬草は、あの森にしか生えてないんだもの……」

叱られてしゅんとするサーシヤ。グレンと呼ばれた男は、仕方ないなという顔をする。

「で、誰なんだあいつら？」

明らかに警戒した顔で、グレンはゲイルとサムを見やる。一步前に出、サーシヤを自分の後ろに隠すと同時に、手に持った武器を構えた。

「何モンだ、てめえら？」

グレンの持つ棍棒には、あちこちでたために釘が打ち込まれている。こんな物、怪物相手にどこまで通用するかはわからないが、少なくとも普通の人間に対しては充分な凶器だ。それを筋骨隆々のグレンが持つと、それだけで威圧感は抜群だった。

だがゲイルは釘バットを構えて啖呵を切っているグレンの姿を見ても、恐怖を感じているように見えない。それどころか薄ら笑いすら浮かべていた。その余裕がグレンの神経を逆なでする。

「なに笑ってんだよ。殺すぞ?」

「いやなに、子供がおもちゃで遊んでる姿が微笑ましくてつい」

「テムふざけてんのか? いっぺん死んどくかコラ」

「できもしない事を言うなって、ママに教わらなかったか?」

「野郎……」

一触即発の空気が漂う中へ、サーシャが割って入った。グレンの袖を引つ張ると、耳打ちをする。

「ちよつとお、あたしの命の恩人に喧嘩吹っかけないでよね」

「なに……」とグレンの顔に動揺が走る。

「あたしが森で怪物に襲われた時、彼らが助けてくれたの。だから警戒しないで。そりゃ見た目はメチャクチャ怪しいけど、悪人じゃないわ」

グレンは乱暴に腕を引いて、服の袖を持つサーシャの手を払う。

「チツ」と舌打ちを残すと、面白くなさそうに地面に唾を吐いて去って行った。

「何だあいつは? お前のコレか?」

サーシャに向けて、親指を立てるゲイル。

「やめてよ、ただの幼馴染。あいつはグレン。村長の孫で、この村の自警団のリーダーなの」

「ガキ大将がそのまんま大きくなりました、って感じだな」

そうね、とサーシャはくすくす笑った。

「さ、それより家うちに行きましょう。お腹が空いてるんでしょ?」

「おう、そうだ。すっかり忘れてた」

「なにそれ？ あんたつて本当に変な人ね」

「そうか？ 初めて言われたぜ。それよりさあ」

「なに？」

「俺、ハラ減つて死にそうなんだけど」

「やつぱあんた馬鹿だわ……」

がつくりと肩を落としつつ、サーシャはゲイルたちを伴って家路についた。

がつがつぼりぼりはぐはぐぼりがりぼりんぼりんぺきつもきつ。

平凡な食卓に、似つかわしくない異音が流れる。ゲイルが食事をしている音だ。両手にものを掴み、それを交互に同時に口に入れる。飢えた獣よりも貪欲に、噛むのも煩わしく飲み込む。一緒に食事をしているサーシャたちは、卓上に空になった皿が次々と積み上げられていくのを呆然と眺めていた。

「見てて気持ちいいくらいの食べっぷりね。まだ足りないでしょ？ もっと作ってくるわ」

「あ、あたしも手伝うわ、母さん……」

サーシャの母　リネアが立ち上がると、娘がそれに続いて台所に向かう。こうしている間にも、皿が次々と空になっていく。ゲイルの食欲はとどまるところを知らず、放っておけば朝まで食べ続けるのではないかと思われた。

「ときにお若いの……ゲイルさんと仰ったかな？　サーシャを助けてくれたそうで、何とお礼を言ったらよいか」

上座に座っている老人　ゴードがゲイルに深々と頭を下げる。すっかり白くなった頭髪が、ぱさりと卓に垂れた。

「ふあ？　何か言ったか、じいさん？」

「いやいや。それより、鳥の骨は残したほうが良いと思うんじゃないか」

「そうなのか？」

そう言いながら、ゲイルは鳥の腿肉を骨ごとぼりぼり食べる。野

生の熊のような豪快な食べっぷりを、ゴードは目を細めて楽しそうに見ていた。

「ところでじいさん、あんた医者なんだって？ 医者が病気になるってりゃ世話ねえぜ」

「お恥ずかしいお話です。しかしこの年になると、体のあちこちにガタがきて難儀しますなあ」

「年寄りなんだから、あんま無理すんなよ」

「それはどうもご親切に。ですが、わしは幸せ者です。こんな老いぼれのために、危険を冒して薬草を採りに行ってくれる孫がおるのだから」

ふ〜ん、とゲイルは気のない返事をして、皿に残った最後の腿肉を頬張る。骨を噛み砕く音が、室内に響いた。

「こうして見ると、本当にただの置物みたいね」

家の前で直立したまま微動だにしないサムを見て、サーシャは独り言のように呟いた。

暗くなった外に、ぽつんと立つ巨大な鎧がひとつ。水晶のような瞳は、まっすぐ何かを見つめているようで、そのくせ何も映していないようにも見える。本当に置物か彫像のようだ。知らない人が見たら、魔除けか何かと思うに違いない。こんなちっぽけな家の前に立たせるよりは、村の入り口に立たせたほうがきつと似合うだろうし、ご利益もありそうだ。

「何か用ですか、サーシャ？」

金属を軋ませ、サムが振り向く。

「サム、本当に中に入らないの？」

「いえ、ここで結構です。私の体重では家の床が抜けてしまいますので」

「そう……。じゃあこれ、あなたの分」

そう言ってサーシャは、手に持っていた盆をサムに差し出す。盆の上には、大きな椀に盛られたシチューとパン、そして焼かれた肉

の塊が乗っていた。

「足りなかつたら遠慮なく言つてね。じゃんじゃん作るから」

「すみませんサーシャ」

サムが謝罪をすると、サーシャは慌てて首を横に振った。

「あ、いいのよ。別に文句を言つてるわけじゃないんだから。うちが女二人におじいちゃんだけでしょ？ 大量の食事を作る事なんて滅多にないから、お母さん張り切っちゃつて」

「いえ、そうではありません」

「え？ どういう事？」

「私には食事が必要ないのです。ですからこれはゲイルに与えてください」

「食欲が無いってこと？」

「簡単に言えば、そういう事です」

「意外と小食なんだ。よくそこまで大きくなれたわね」

「私は生まれた時からこういう体なんですよ」

サムのまったく冗談っけのない声に、サーシャは吹き出した。盆が揺れ、腕のシチューが波打つ。

「ゲイルもそうだけど、あなたも変わった人ね」

「初めて言われましたよ」

「ふふっ、同じこと言つてる」

「相棒ですから」

「あんなのが相棒じゃ、あなたも苦勞が絶えないわね」

「慣れていきますので。けれどサーシャ、ゲイルを悪く思わないで

ください。彼は、その

「言いよどむサムに、サーシャはどうしたのと訊ねる。

「彼が人や自分の言つた事を忘れてしまうのは、理由があるので  
す」

「知つてるわ。馬鹿だからでしょ？」

「いえ、そういう意味では……」

「冗談よ。たしかにあいつは馬鹿で下品で子供みたいな奴だけど、



あたしはああいう馬鹿って嫌いじゃないわ」

一人で納得してにこりと微笑むサーシャ。

そうですか、とサムは納得したのか説明するのを諦めたのか判らないが、そのまま黙ってしまった。

家の中から、サーシャを呼びネアの声があった。料理の追加ができたのだが、盛り付ける皿が足りないから洗ってくれと頼んでいる。

「あたし行かなくっちゃ。本当に食べなくて平気？」

「問題ありません」

「そう……。じゃあ食欲が出たらいつでも言って。もっとも、材料が残ってたら話だけ」

おどけたように笑うサーシャに、サムはお気遣いどうもと応えた。

「あ、それとね、サム」

「何でしょう？」

「まだ……お礼言ってなかったわよね。助けてくれて、ありがとう」

今さらという感が否めず、サーシャは少し恥ずかしくなる。けれど怪物に襲われたりゲイルとサムのような奇天烈な人物と出会ったせいで、そこまで頭が回らなかったのだ。

「貴方を助けたのはゲイルです。お礼なら彼に言っておいてください」

「そう……。でも一応ね」

「そうですね。では一応、どういたしましてと言っておきましょう」

サムの律儀な返答が、妙におかしかった。これでよくあんなちゃらんぼらん男と一緒にいられるものだと思う。

それじゃ、とサーシャが家に戻ろうとした時、家々の明かりに混じって小さな灯りがゆらゆらと動いているのが見えた。灯りはゆくりとこちらに近づき、やがてそれは誰かが手に持った松明だと判る。

松明はひよこひよここと波打つように上下に揺れ、サーシャの家か

ら漏れる明かりに照らされると、一人の杖をついた老人の姿が現れた。

「こんばんは、村長さん」

「はいこんばんは、サーシャ」

サーシャが挨拶をすると、老人はにっこりと笑った。深い皺がびっしりと刻まれた皮膚が、剥がれ落ちてしまいそうな笑みだ。頭は禿げ上がっているが、代わりに白い髭が豊かに生えており、背筋は曲がっているが杖を持つ手はしっかりとしている。

「村長さん、また腰が痛くなったの？ お薬はまだ残ってると思っただけど」

「違うんだサーシャ。今日は患者ではなく、村長として来たんだよ」

サーシャはちらりとサムのほうを見たが、サムの目は松明の光を反射させているだけだった。

村長はゲイルの向かいに座り、観察するようにじっと見つめていた。

ゲイルは食事を中断されたのが気に入らないのか、むすつとした顔を台所に向けている。台所ではサーシャが、村長が何の用かと緊張した面持ちで覗いていた。娘の背後ではリネアが、できあがった料理を運べず冷めてしまうのではないかと困っている。

「それで、いったい俺に何の用だよ？」

不機嫌さを隠さない声で、ゲイルが村長に言う。礼儀も何も無い物言いだ、村長は気にしたふうもなく真剣な眼差しをゲイルに向けている。

「実は、おりいってご相談がありまして、こうしてお話をさせてもらいに参りました」

丁寧が過ぎる話し方に、ゲイルは舌打ちする。肩書きのある人間や目上の者がこういう話し方をする時は、どうせ禄でもない話だろうという感情がありありと出ていた。

「森の怪物を、貴方が倒されたと孫から聞きました。さぞや名のある武芸者だとお見受け」

「能書きはいいからさっさと本題に入れ。俺はメシを邪魔されるのが、不味いメシの次に嫌いなんだよ。そしてその次に嫌いなのが、メシが冷める事だ」

「これは……知らぬとはいえ、お食事を邪魔して申し訳ありません。では」

村長は卓の上で手の指を組むと、大きく息を吐いた。言いたくない事を仕方なく言わなければならぬような、そんな溜め息にも似た吐息だった。

「貴方にこの村に留まって、用心棒になっていたかいたいです」「どうせそんなこつたろうと思ったよ」

相手が用件を予想していた事に、村長の表情が明るくなる。

「そ、それでは」

「いやなこつた」

だが明るくなった顔はすぐに曇った。

「え……………？」

「俺たちにはそんな暇も、この村を守る理由も無い。だいたい、この村には自警団があるだろ。あいつらを鍛えろ。特にお前の孫を」

「し、しかし……………怪物は城の騎士団ですら歯が立たないのです。」

そんなものに勝てるようになるまでには、いったいどれほどの月日がかかるか……………」

「だいたい、森の化け物はもう居ないんだ。用心棒なんて必要ないだろ」

「それが、そうでもないのです……………」

どういふ事だとゲイルが促すと、村長は訥々と語り始めた。

最初に怪物が現れたのは、やはり十年前。村の守り神である火山が活動を再開した直後だった。

だが怪物は知能があまり高くないのか、それともそういう性質なのか、縄張りの森からほとんど出なかった。おかげで今まで村が無事だったのだが、その怪物がいなくなった今、空き物件となった森に次の新たな怪物が住み着く可能性がある。それどころか下手をすれば、新しい怪物は餌を求めて縄張りを広げる性質を持っているかもしれない。そうなれば森に近いこの村は、格好の餌場となるだろう。

つまりゲイルのした事は、いたずらにこの村の危険を増やしただけなのだ。一つの因子を排除すると、全体のバランスが崩れて思わぬ災害が起きる。自然とは、人間が手を加えて調整できるほど単純ではないのだ。

「こつ言いたくはありませんが、貴方には責任をとっていただきたい。せめて安全が確認されるまで、しばらくこの村に留まっただけなんでしょうか？」

責任を問われ、ゲイルも無碍に断ることはできなくなった。さすが村長である。下手に出ていながら追求すべきところはする。見かけに似合わぬ老獪さに、ゲイルは苦虫を噛み潰すような顔をした。

「わかったよ……責任とってやるよ」

ゲイルが観念したように言つと「おお、それでは……」と今度は村長の顔が明るくなる。

「ただし、俺たちにも都合というものがある。一週間で手を打とうじゃないか」

「ほほお、一ヶ月も滞在してくれませうとな？」

「いや、一週間だって」

「へ？ 最近耳が遠くなつて……。一年とはまた気前がいい」

「おい、じじい……」

「わかりました。まずは一週間という事で、よろしくお願いします」

「長生きするぜ、クソじじい……」

「おかげさまで、今年九十歳になります」

平然としている村長に、ゲイルは苦笑いする。老人に手玉にとられたような気がするが、不思議と怒りは湧かなかつた。

「……で、何であんたがあたしの家に居候するのよ？」

「別に俺がそうしたいって言つたわけじゃねえよ」

寝耳に水な話に啞然とするサーシャに、ゲイルは不機嫌そうな顔で悪態をついた。

「あら、お母さんは賛成よ。若い人がいると、にぎやかになつていいじゃない」

「年頃の娘が居る家に、男を泊める母親がどこに居るのよ！」

「安心しろ。俺はお前を女だと思つていない」

「あんたは黙つてて！」

村長が帰つた後、サーシャの家ではゲイルを交えて家族会議が開催されていた。議題はもちろん、ゲイルをこの家に泊める事である。

サーシャは頑なに拒否するが、意外にも反対するのは彼女だけだった。

「ゲイルさんはあなたの命の恩人なんだから、うちに泊まってもらうのが筋というものでしょ？」

「それはそうだけど……。ちょっと、おじいちゃんも何か言つてよ……」

助けを求めて祖父を見やるが、ゴードはにこにここと笑顔で賛成を表明している。サーシャの知らぬ間に、家族はゲイルたちを家に泊めると決めていた。見ればリネアは、迷惑そうなゲイルに年はいくつだとか、年下の娘に興味はあるかななどとあれこれ質問している。これはもう自分に勝ち目は無いと悟ったサーシャは、渋々ゲイルたちを泊める事を認可した。こうしてゲイルたちは、晴れて当座の宿を確保したのだった。

納屋の扉を開けると、埃とカビの臭いがサーシャの鼻をついた。くしゃみを連発し、涙目になりながら扉と部窓を全開にして換気をする。

納屋の中には今は使われていない農具や、薬を調合する乳鉢や薬研などが置かれていた。広さはそれほどでもないが、天井が高く入り口も広い。何より土間なので、サムの体重でも踏み抜くことがない。

「本当にここでもいいの？」

サーシャが念を押して確認する。ゲイルは物珍しそうに納屋に放置された品々を眺めながら、上等上等と頷いた。

「いつも野宿ばかりだったからな。雨風さえ凌げればどこでもいいよ」

「……あなたたちって、今までどんな生活してたのよ？」

「そうだな……。獲物を追って東に西に感じてだ」

「狩人なの？」

「ま、そんなところかな」

「ふん……」

「どこの世界に手ぶらと全身鎧の狩人がいるのだろう。適当にはぐらかされている気がしたが、サーシャはそれ以上余計な詮索はしなかった。どうせしばらく我慢すれば、二人はこの村から去るのだ。あまり深く関わってもお互いに得はない。」

「明日はここを片付けて、それから村の中を案内してあげるね」  
ゲイルに毛布を渡すと、サーシャは二人におやすみと言って家の中に戻った。

サーシャが家の中に入るのを見届けると、ゲイルは納屋の中のがらくたを隅に追いやる。どうにか二人分のスペースを確保すると、さっさと毛布を敷いて横になった。

「本当にこの村に滞在するのですか？」

「ずしん、とサムがゲイルの横に座る。納屋の壁にもたれかかると板がみしみしと悲鳴を上げたのですぐに壁から背を浮かす。」

「仕方ねえだろ、責任取れとか言われちゃ……。それにキャサリンのサーチが終わるまでしばらくかかるんだ。野宿するより、屋根があつて美味しいメシが出るほうがいいだろ」

「ですが、良いのですか？ 滞在するという事は、少なからずこの村の人間と関わりを持つ事になりますよ？」

「寝泊りするだけなら大丈夫だろ。それよりあのおふくろさんのメシ、美味かつたなあ」

寝返りをうち、腕を頭の後ろで組むゲイル。夕食の味を反芻しているのか、口元がゆるんでいる。

「味なんてわからないでしょうに」

「だがせっかく食える体なんだ。食えない奴の分まで食ってやりたくなるじゃないか」

「昔の習慣が抜けないのも考えものですね」

「そうだな。寝ないで済むなら、ずっとお前の相手をしてやれるんだが……」

「仕方ありません。任務中は待機モードにできませんからね。け

どもう慣れました」

ゲイルは「そうか」大きな欠伸をする。昼間あれだけ暴れたのだ。満腹も重なって、眠気もピークを迎えている。怪物を素手で屠るゲイルも、睡魔には勝てないのだろう。

目を閉じ無言になると、やがて規則正しい呼吸音が聞こえてきた。サムはゲイルの寝息を聞きながら、ずっと納屋の奥の暗闇を見つめていた。



ぼんやりとした視界の先に、淡く光る天井が見える。天井全体が有機ELで光り、下着一枚のゲイルを照らしている。

横たえた体は手足や胴体、首にいたるまで拘束されていた。頭もぼうつとして働かない。かろうじて動く目だけを使って、ゲイルは辺りを見回した。

白い天井。白い壁。窓も扉も見えない、ただ白い部屋。そうだ、ここはキャサリンの研究室に似ている。彼女はステロタイプな人間で、研究室は白で統一しているのだ。

しばらく体をよじったりしていると、首の拘束に少し余裕ができた。だが頭を少し持ち上げるだけで、拘束具が首を締める。苦勞して首を巡らせると、やはりここが彼女の研究室だという事が判った。顎を精一杯上げて後ろを見ると、心電図や数台の医療機器が並んでいるのが見えた。心電図のモニター画面では、緑の線が波を描いている。他の機械から伸びたコードが、ゲイルの体のあちこちに繋がっていた。

さらに首を巡らすと、自分の足の向こうに人影があった。いや、それは人ではなく、物言わぬ巨大な機械であった。

人の体を模して作られた作業機械は、沈黙とともに起立している。電源が入っていないのか、それとも待機モードに入っているのか。ゲイルと同じように無数のコードに繋がれた巨人は、主が声をかけるのを待っている忠実な犬のように、ただじっとしていた。

頭が痛い。頭の中に、ぼっかりと何かが欠けた空洞がある。欠けたものが何かは判らないが、確実に何かが欠けている事だけは実感できる。脳ミソがまるで、穴だらけのチーズのようだ。しかもその穴に、まったくそぐわない別の何かを挿入されている。繋がらない記憶。覚えのない知識。いったいいつ、どこで自分はこんな経験をしたのか。だが確かに情報として自分の脳にある。とんでもない違

和感に気分が悪くなる。

ゲイルが目を覚ますのを見計らったように、どこかかと大勢の間が室内に入って来た。無いと思っていたが、どうやら扉は機械類の先にあつたようだ。あつと言う間にゲイルは白衣を着た集団に囲まれた。

声を上げようとするが、声が上手く出ない。掠れた声で誰だ何だと叫ぼうが、白衣を着た者たちは無言でモニターの数値を記録したり、操作盤コンソールをいじったりしている。

また扉が開いて誰かが入ってくる。今度は白衣ではない。宇宙連邦治安維持局スミーカーの制服を着た男が部屋に入ってきて来ると、白衣を着た連中に緊張が走った。

白衣の一人が、制服の男に敬礼をする。白衣の男は、相手が明らかに自分より年下なのにも関わらず、恐縮した態度で接していた。

「ダラズ係長、被験者が目を覚ましました」

「異常は？」

「ありません。肉体ボディは今のところ順調です。ただ……」

「ただ、何だ？」

「脳に若干の後遺症が残ります。具体的には、変則的な記憶の欠如や性格の変化が出る可能性が高いかと……」

このまま作業を続けますかという問いに、ダラズはほんの僅かだけ考える姿勢を見せた。だがすぐに瑣末な問題だという結論に至る。

「作業を続ける。記憶の混乱フィードバックに注意し、脳神経シナプスを形成、接続。人格や精神に障害が起こったら直ちに対処。問題があるなら全て消去して、再インストールしてもいい。ボディは壊れても構わんが、データの保存を最優先しろ」

「りよ、了解しました……」

白衣の男はダラズに再び敬礼をすると、他の者たちに向けて指示を出す。部下たちは黙々と作業に取り掛かった。

「さて……」

ダラズが神経質そうに、片手の小指で眼鏡の位置を直す。ゲイル

に近づきしげしげと彼の姿を眺めると、口の端を歪めてほくそ笑んだ。

「いい格好だな、ゲイル。気分はどうだ？」

ゲイルの気分は最悪に決まっている。だがそれ以前に、どうして自分が実験動物のような扱いを受けているのか見当がつかない。

「恋人を利用して連邦学術院アカデミーからデータを盗み出し《ハッキング》、それを自分のものにするとは。なんて悪い奴なんだお前は」

ダラズの言葉は、ゲイルをますます混乱させる。まったく身に覚えのない話に、頭が痛みを増した。

連邦学術院は、この世のありとあらゆる技術や知識を研究するための機関である。宇宙の英知を集めたこの機関には、様々な研究者が集まる。ゲイルの恋人、キャサリンもその一人だ。

そして連邦学術院には、もう一つの役割がある。それは、個人や組織で所有するには、あまりにも危険な技術や知識を封印する事だ。機関の機密には、惑星はおろか宇宙そのものを破壊しかねない危険な技術テクノロジーが数多く存在する。

「俺が……キャサリンを利用したと？」

「そうだ。お前は研究員の彼女を使って、連邦学術院の機密を盗み出したんだ。これは極刑を免れない大罪だぞ」

「そ、そんな……」

自分が処刑される。しかもそれが身に覚えのない罪によって。あまりにも理不尽な現実には、ゲイルは目の前が真っ暗になる。ダラズはゲイルの絶望した表情に、満足げに笑った。

「だが運が良かったな。お前も知つての通り、我々宇宙連邦治安維持局は、そういった技術や知識を持つ者を取り締まる機関だ。お前は今や、個人で持つにはあまりにも強大な力を有している。言い換えれば、お前はその辺の兵器よりも危険な存在なんだよ」

「危険な存在……俺が？」

「そうだ。お前の体には、連邦学術院に封印されていた数々の禁忌が詰め込まれている。よってお前の身柄は今後、我々に管理され

る事になる」

殺されるよりはマシだろうと、ダラスは何の慰めにもならない事を言う。宇宙連邦治安維持局に管理されるという事は、人間としてではなく一つの兵器として管理されるのと同じだ。

「俺が……兵器……」

「そうだ。お前は我々が求めていた兵器だ。連邦学院は、我々がいくら連邦宇宙軍を牽制するために武力が必要だと要請しても、一度封印したテクノロジーは決して表に出さなかった。だが遂にその力を手にする事ができた。それがお前だ。お前は我々宇宙連邦治安維持局の いや、私のものだ。私の手足となって働け」

ぎりぎりとゲイルが歯を軋ませる。ダラスの自分勝手な物言いに、怒りが込み上げてくる。何が私のものだ。何が私の手足だ。自分は物でも兵器でもない。人間だ。

「ああ、そうだ。一つ礼を言っておこう。お前を検挙する事で、私の手柄が一つ増える。これで昇進は間違いなしだ」

歯茎から血を滲ませるほど強く噛み締め、獣のようにゲイルは唸る。これほどまでに侮辱されたのは生まれて初めてだ。だが獣の如く繋がれた体は、彼の怒りがダラスに及ぶのを妨害していた。何より、硬化テクタイトで作られた戒めは、人の力で破れるものではない。

「どうした、悔しいのか？ ならば一つ良いニュースをやるう。

お前の恋人…… キヤサリンとか言ったか」

恋人の名を聞き、ゲイルの目に理性が戻る。自分の事で失念していたが、ここは彼女の研究室なのだ。なのに姿が見えない事に、どうして気づかなかつたのだろう。

「彼女も本来は極刑だったのだが、お前に騙され利用されたという事で、情状酌量となった」

「それじゃあ、彼女は……」

助かるのか、という言葉は声にならなかった。彼女が極刑を免れたというだけで、ゲイルは安堵のあまり声を失っていた。

「ただし、彼女は精神を脳に移植後、我々が管理する。肉体は冷凍保存だ」

ゲイルは息を飲む。それではただ殺されていないだけで、死んだも同然ではないか。

「どうして……どうしてそんな事を……？」

嗚咽のような問いかけに、男は冷ややかな声で答える。

「人質だよ。お前を私に従わせるためのな」

たったそれだけのために。たったそれだけのために彼女の肉体から魂を抜き取り、あまつさえ肉体を氷漬けにしたのか。

「うがあああああああああああああああああああああつ！」

ゲイルは怒りで目の前が真っ赤に染まり、喉が裂けんばかりに叫ぶ。びりびりと壁を振動させる咆哮に、周りで作業をしていた白衣の男たちが動揺する。

怒りに身を任せてゲイルは暴れる。枷が肉に食い込むのを無視し、我を忘れて暴れる。だが硬化テクタイト製の枷は、たとえ重機を使おうともびくともしない代物なのだ。

が。

びし、とゲイルの両腕を拘束していた枷にヒビが入る。次に両足、腰、首の枷にも次々と亀裂が入った。

「殺してやるっ！」

呪詛のような気合とともに、遂にゲイルを繋いでいた枷が砕け散った。背筋の力だけで天井まで飛び上がったゲイルは、身を翻して両足で天井を蹴る。

有機E1の天井に大穴が開く。天井を蹴った勢いで、ゲイルはドラズに向かって飛んだ。

「死ねえっ！」

必殺の念を込め、ゲイルは男に拳を振るう。硬化テクタイトをも引きちぎる筋力で振るわれた拳は、ドラズを原型留めぬ肉塊に変えようと襲いかかる。

「ぐあ……っ！」

突如、ゲイルの頭に激痛が走る。脳に直接溶けた鉄を流し込まれたような痛みにバランスを崩し、ダラズの側に転げ落ちた。

「あ……頭が、割れる……」

床で頭を抱えて悶絶するゲイルの顔を、ダラズが踏みつける。

「阿呆かお前は？ 銃にだって安全装置があるだろ。お前のような凶悪なケダモノを、何の躰もせずに野放しにするとでも思ったか？」

ダラズは何度も足を捻り、ゲイルの顔を靴底で踏みしめる。

「お前がおいたをしないように、頭の中を少々いじらせてもらった。宇宙連邦治安維持局 いや、この私に邪な考えを抱くだけで、脳に激痛が走るようにな」

顔を踏む男の足よりも、脳を直接襲う激痛にゲイルは悶える。いかに強靭な肉体であろうと、脳を焼き焦がす内部からの苦痛には抗いようがない。

「あの女を生かすも殺すも、すべて私の気分一つだ。恋人が大事なら、大人しく私に従い手足となれ。そしてもっと私を出世させる」  
痛みが増し、気が遠くなる。薄れゆく意識の中で、ゲイルは恋人の名を呟く。だがその声は、ダラズの笑い声によってかき消された。

「ゲイル、起きてください。ゲイル」

相棒の呼ぶ声で、ゲイルは目を覚ました。納屋の中は、まだ暗い。蔀窓から覗く夜空には、まだ星が輝いている。

「何だよサム……もう朝メシか？」

「通信が入りました」

まだ眠気が覚めないゲイルは、欠伸をしながら目をこする。夢見が悪かったせいか、やけに喉が渴いていた。

「通信？ 定期報告はまだのはずだろ？」

「とにかく応答してください」

出します、とサムの両目が光ると、納屋の暗闇に一人の男性の姿が現れた。立体映像だ。ホログラム

「貴様ら、仕事は万事順調か？」

通信相手の姿を見た瞬間、ゲイルは露骨に嫌な顔をして舌打ちをする。

「いつたい何時だと思ってるんだよ。今が朝に見えるようなら、眼鏡と時計を買い換えるんだなクソ野郎」

頭をかきながら、ゲイルは男に向かつて悪態をつく。だが男は冷笑を浮かべるだけで、まるで気にした様子はなかった。

「相変わらず口の利き方がなってないな。ダラス・ウエストパツク特務捜査課長殿と呼べ」

「フン、誰のお陰で課長になれたと思ってやがる。お前が昇進できるのは、俺たち特務捜査官が挙げた功績を掠め取ってるからだろ」

「飼い犬が獲って来た獲物を、主人が食って何が悪い。貴様ら犬は黙って私のために狩りをすれば良いのだ。それとも、恋人がどうなっても構わないのか？」

爬虫類じみた笑みを浮かべ、ダラスは片手で眼鏡の位置を正す。薄い色のついたレンズの奥の眼光は、彼が冗談や脅しで言っている

のではない事を証明している。

「てめえ……。ぐっ……」

ゲイルは敵意を剥き出しにするが、すぐに苦痛で顔を歪める。ダラスに怒りを覚えるだけで、脳に粛清の痛みが走るのだ。

「どうした？ また良からぬ事を考えたか？ 犬でも痛みを与え続ければ従順になるというのに、貴様はいつまで経っても学習しないな。この犬以下め」

嘲笑するダラスの声が、ゲイルの痛みを増加させる。ダラスへの怒りの炎が燃えるほど、熱く脳を焼かれる。だがゲイルはダラスを憎む事をやめない。痛みに屈して服従するくらいなら、脳を焼かれて発狂する事を選ぶだろう。だがそれはできない事だ。

「まるで狂犬の目だな。噛みつきたくてウズウズしているようだ」  
「よく解かっているじゃねえか。それが立体映像じゃなかったら、今すぐ噛み殺してやるんだがな」

痛みを抑え込み、ゲイルはにやりと笑って骨すら噛み砕く歯を見せつける。威嚇するようにがちがちと鳴らすと、完璧に安全だと判っているダラスですら、僅かにたじろいだ。

「無駄話はこれくらいにして、そろそろ本題に入っていただけませんか。ダラス・ウエストパック課長殿」

「む……そ、そうだな……」

サムという言葉に、ダラスは冷静さを取り戻す。気を落ち着けるように眼鏡を正すと、先ほどまでの怯えた様子はどこにもなかった。

「それで、どういったご用件でしょうか？ 定期報告はまだだと思えますが」

「なに、キャサリンが稼動したのをこちらで確認したのでね。その理由を問い質しに来たのだよ」

「チ、いちいち小言を言いにきやがって。お前は小姑か」

「ゲイル、経費は無限じゃないのだよ。あれを稼動させるのにいたいどれくらいエネルギーを必要とするのか、知ってて言っているのかね？ 私が納得できる理由があるのなら、言ってみたまえ」



「私が報告します」と、サムが片手を上げる。

「我々は標的の位置を特定するサンプルを入手しました。そのデータを元に惑星全域をサーチする事で、捜査の時間が短縮され、結果的に経費節約になると判断したのです」

ゲイルはポーチを探ると、蟻頭から抜き出した核を取り出した。

「こいつがそのサンプルだ」

ダラズはゲイルの手の上で光る核を見て、ふむと頷く。ぶつぶつと何か小声で呟いているのは、頭の中でソロバンを高速で弾いているのだろう。経費はかかるが短期間で捜査を終えるのと、経費を安く抑えても捜査が長引くのでは、どちらが自分の評価に良いか。ダラズは耳から煙が出そうな集中力で演算する。

「……まあ今回は大目に見てやるう。ただし、今回だけだぞ。経費に見合う結果が出せなかった時は、覚悟しておけ」

捨て台詞を残し、ダラズの姿は掻き消えた。どうやら彼の弾いたソロバンは、サムの判断を是としたようだ。

サムの両目から光りが消えると、納屋に再び暗闇が訪れる。蔀窓から入る僅かな星明かりだけが、うつすらと中のがらくたを浮かび上がらせていた。

「フン、覚悟するのはめえだ」

ゲイルはダラズが立っていた場所に唾を吐く。立体映像だろうが、彼が立っていたというだけでその地面が汚染されたかのような反応だ。

「管理職というのは、経費や部下の事で頭を悩ませるのが仕事ですからね」

「フン。あんな奴、上司でも何でもねえ。ただの敵だ」

「気持ちは解かりますが、彼しかキャサリンを助けられないという事を忘れないでくださいね」

「わあってるよ。それに、俺たちは直接あいつを攻撃できない。

……何とか上手い手を考えないと……」

う、と眉間に皺を寄せるゲイル。だがそれは知恵を絞って考えて

いるせいではない。恋人を奪った憎き相手に怒りを覚えるだけで、彼の脳には耐え難い苦痛が走るのだ。だがその痛みが脳改造手術の後遺症で記憶障害を持つ彼に、キヤサリンを助けたいという思いと、ダラズたちを憎む気持ちを深く刻み込んでくれるのだ。

だから彼は、この脳が焼け付く痛みをあえて受ける。この思いを決して忘れないように。

「幸い、我々には時間だけがあります。焦らずにじっくりと策を練りましょう」

「……そうだな。こればかりは焦りは禁物だ。失敗は許されないからな」

ダラズ一人を殺すくらいなら、方法などいくらでもあるだろう。だが冷凍刑にされたキヤサリンを解凍し、精神を電腦から肉体に再移植する権限を持つダラズにとって、彼女は人質というよりは保険だ。無論、ダラズもそれを計算に入れているはずである。

苛立つ気持ちを抑えつつ、ゲイルは再び横になる。今度は目が冴えて、なかなか寝付けなかった。

翌朝、サーシャが勢い良く納屋の扉を開けると、ゲイルの奇妙な姿に意表を衝かれた。

「きゃあっ！」

驚いて悲鳴を上げる。それもそのはず、ゲイルは目を開けて眠っていたのだ。しかも手足が全てばらの方向を向いている。いったいどういう寝方をすれば、こんな格好になるのか見当もつかない。寝相が悪いというレヴェルを遥かに超えていた。

「おはようございます、サーシャ」

「お、おはようサム……」

「どうかしましたか？ 顔がひきつってますよ？」

朝から珍妙なものを見たという顔をするサーシャに、サムが体育座りのまま訊ねる。サーシャは、こんな格好をして寝ている奴の隣にいて平気なサムのほうがどうかしていると思った。

「あ、あのさサム。こいつって、いつもこんなに寝相が悪いの？」

サーシャの問いかけに、サムはふむ、と改めて相棒の寝姿を見る。

「今日はいくらかマシなほうですね。酷い時には三点倒立をしていたりしますから」

「どういつ寝返りを打ったら、そんな体勢になるのよ……」

「さて……私には答えかねます」とサムは小首をかしげた。

見ればゲイルはレム睡眠中なのか、眼球がぴくぴく動いていた。痙攣するような黒目の振動に、サーシャは「ひいっ」と小さく悲鳴を上げる。

「ああもう、気持ち悪い！」

あまりの気味の悪さに、サーシャはゲイルの毛布を引つpegす。ゲイルはごろごろと床を寝転がると、壁に勢い良く顔面からぶち当たる。

「うっ……！」

「ほら、いつまで寝てるの？ もうお天道様はとつくに昇ってるわよ！」

サーシャが腰に手を当てて怒ると、ゲイルは勢い良く起き上がった。

「何て起こし方しやがる。お前は俺の幼馴染か？」

「なにワケのわからない事言ってるの。さつさと起きないあんたが悪いのよ」

打ち付けた鼻をさすって喚くゲイルを軽くあしらい、サーシャはすました顔で毛布を畳む。態度の悪い客の扱いに慣れた旅館の女将のようだ。

「朝ごはんが片付かないから、早く顔洗ってきてよね」

「朝メシか……。フン、今日はこのくらいで勘弁してやろう」

鼻を鳴らすと、ゲイルは意味不明な捨て台詞を残して納屋から出た。井戸を使って水を汲み、顔を洗う。

「ゲイルの扱いかたを心得てますね。お見事です」

「馬鹿は扱うのが簡単で助かるわ」

サーシャは得意げに胸を反らす、ふとサム of 鎧姿を見て僅かに眉をひそめた。

「……あなた、もしかしてその格好で寝てたの？」

「同じ姿勢という意味でなら肯定ですが、睡眠という部分是否定します」

体育座りのまま、しれっと答えるサム。そういう意味で訊いたわけではないのだが、あまり深く追求してはいけないような気がしたので、サーシャは「ふ、ふん……」と微妙な相槌を打つにとどめた。

朝食が済むと、サーシャはゲイルとサムを連れて村を案内した。

村には大小様々な家が建ち並んでいる。人口はせいぜい三百人といったところか。家と家の間隔がまちまちなのは、あちこちに置かれてある岩を避けて建てられているせいだろう。天気の良い朝なので、

庭には干された洗濯物が見える。

村人の多くは朝日とともに農地に赴き、外を歩いているのは散歩をする老人か遊んでいる子供だけだった。サーシャを目にすると挨拶をしようとするが、ゲイルとサムの間を見ると皆一様に不審な顔をする。老人は精一杯の早足で家に帰り、子供たちはサムの巨大さに目を丸くする。

「みんなサムを珍獣みたいな目で見て行くぜ」

村人の反応を、面白そうに笑うゲイル。

「あんたも珍獣の仲間じゃない」

「失礼な事を言うな」

「なに『心外だ』みたいな顔してるのよ。存在そのものが失礼な珍獣のくせに」

「そう……なのか……」

地面にがつくりと膝をつくゲイルを無視し、サーシャとサムは歩き出した。

奇妙な事に、村には若者の姿がまるでない。仕事に出かけている事を差し引いても、異常と思えるくらい目にする事がまったくなかった。

「今はみんな、見回りに出ているのよ」

ゲイルの疑問に、サーシャが答える。村の若い男は全員自警団に身を置き、この時間は村の近隣を見回っているのだそうだ。男が村を守っている間、女は田畑を耕す。怪物が出没し始めてからのシステムらしい。

「とは言っても、今まで一度も怪物を退治した事ないんだけどね」

「そりゃ素人の寄せ集めじゃあな」

「刈り入れの時期だけは、人手が必要だから見回りも減るんだけど、それ以外はいつも見回りや訓練ばかりやってるわ」

兵隊にでもなったつもりなのかしら、とサーシャは愚痴を漏らす。どうして男という生き物は、いくつになっても戦争や兵隊に子供っぽい憧れを抱くのだろう。理解に苦しむ。兵として戦に出れば、死

ぬかもしれないのだ。

サーシャは父の事を思い出すと、今でも胸が痛くなる。祖父も母も、きつとそうだろう。

「おい、どうした？」

ゲイルに声をかけられ、サーシャははっと顔を上げる。いつの間にか俯いて歩いていたらようだ。

「別に。何でもないわ」

「そうか？ 前を向いて歩かないと、躓いて転ぶぞ」

「なによ、子供扱いしないでよ」

「すまん、悪かった」

思いがけずゲイルが素直に謝ったので、サーシャは強く言ってしまった事を後悔した。

「え、いや、その……」

考えてみれば、これまでゲイルへの態度が少しきつかったように思える。助けてもらったお礼もまだはつきりと言っていないし、このままずると引き延ばしにするのは気分が悪い。やはりはじめはきちんとつけておかなければ。

「あ、あのね……今さらだけど、助けてくれて」

「胸がまつたいらだから、ガキかと思っちまったよ。紛らわしいんで今度から、年齢と？こっちが胸です？って書いた札を首から下げといてくれ」

両手を叩いて大笑いするゲイル。最初に出会った時、彼を物語の勇者と思い込んだのは絶対に気の迷いだっただの。心の中で昨日の自分を叱りつつ、サーシャはゲイルの尻に容赦のない蹴りを入れた。

村の中央に来ると、ちらほらと店が見え始めた。町とまでは言わないが、そこそこの数の店が並んでいる。そもそも、食料はほぼ自給自足している。だから必然的に農具を直す鍛冶屋や金物屋、布屋や仕立て屋など生活に密着した専門店が目につく。

「フン、生意気に貨幣が流通してやがる」

「ん？ 何か言った？」

「いや、別に。ところで、あれは何だ？」

ゲイルは、少し離れた小高い丘を指差した。丘の上には丸太で組んだ格子状の柵が建てられ、中には巨大な黒い岩が納まっている。丘は勾配の差が激しく、村の近くは緩やかだが、中ごろになると急激に高くなっている。

岩の向こうには林があり、木のてっぺんが見えた。木の高さから想像すると、岩はとんでもない大きさだった。

「あの大岩はね、昔からこの村にあったの。なんか大昔、火山が噴火した時に降ってきたんだって」

「随分大きい岩ですね。あの火山からここまで飛んで来たのですか？」

「そうよ。村にある岩は、全部その時に降ってきたものらしいわ」  
「そういえば、村のあちこちに岩が置かれてましたが、そういう事ですか」

三人の立っている場所からでも、岩の大きさや重さが見てとれる。近くで見れば圧倒されるだろう。岩の放つ存在感が、当時の噴火の凄まじさを物語っている。

「森の怪物の倍以上はデカいな。もしあれが村に転がって来たら、大惨事だろうぜ」

「ゲイル、冗談でも不謹慎ですよ」

冗談めかして笑うゲイルを、サムが注意する。

「大丈夫よ。ああやって困いをしてあるし、最近何度も地震があったけど、びくともしなかつたんだから」

「しかし、万が一という事が」

突然サムが黙る。直後、地面が揺れ始め、あたかもゲイルの冗談が現実になったかと思われた。

「うおっ、マジかよ？」

「やだ。あんたが不吉な事を言うからよ！」

「俺のせいかな？ 俺は預言者か？」

「二人とも落ち着いてください」

揺れはそれほど大きくなかったが、用心のために商店から店主や客が外に出てくる。道を歩く人たちも、慌てず騒がず地面に伏せたりそれぞれ避難行動をとっていた。

地震は一分ほど続いた。揺れが完全に止まると、人々は何事もなかったように店に戻ったり散歩の続きを再開する。

「……やっと止まったか」

地面に伏せた状態で、ゲイルは辺りを見回す。他の人々は皆もと  
の日常に戻っており、地面に伏せているのは彼らだけであった。

「やれやれ、みんな慣れたもんだな」

ゲイルとサーシャは、手や服についた土を払いながら立ち上がる。

「良かった、小さくて。それじゃ、次に行きましょう」

「ああ、とつとと済ませてメシにしようぜ。俺ハラ減っちゃまった

よ

「あれだけ朝ごはん食べて、まだ食べるつもりなの？」

「あれ？ 俺朝メシ食ったっけ？」

「あんた胃と脳ミソに穴が開いてるんじゃないの……？」

漫才のようなやりとりをしながら、二人は並んで歩き出す。ゲイルが後ろを振り返ると、サムはまだしゃがみ込んで両手を地面に着けていた。

「どうしたサム。腰が抜けたか？」

「いえ、少し気になる事が……」

「早く来い。置いて行くぞ」

「あ………」

サムが言い終わる前に、ゲイルは背を向けた。サーシャは立ち上がらないサムを心配そうに見ている。サムは数瞬考えて、結局何も言わずに立ち上がった。



太陽が高くなり、陽射しが強さを増す。初夏の田畑を撫でる風は、青々とした臭いをふんだんに孕んでおり、鼻腔いっぱい広がる草の臭いは、森で感じたそれよりも乾いていて心地良い。

三人が風に吹かれてあぜ道を歩いていると、畑で作業をしている人々が見えた。

人々は額に汗を滲ませながらも、実に楽しそうな顔で働いていた。見回りや訓練が終わったのか、男たちの姿も見受けられる。サーシヤは作業をしている人に逐一声をかけて回り、先の地震でケガをしていないか、ケガをした人はいないか訊ねて回った。

そのうち年配のご婦人たちに囲まれ、今度はサーシヤが質問される側になった。ご婦人たちがちらちらとゲイルたちを盗み見るたびに、サーシヤは真っ赤になって両手を振っていた。

「彼女は善い子ですね。ご近所の人気者といった感じでしょうか？」

「フン、ただのお調子者だろ。あの凶暴さは看板娘ってガラじゃねえぞ」

ゲイルはサーシヤに蹴られた尻をさする。素人とは思えない綺麗なフォームで入った中段蹴りは、的確にゲイルの尾てい骨にヒットしていた。ダメージの軽減される尻肉を狙わないところに、天性の素質を感じる。

「それはゲイルが彼女の嫌がる事を言うからでしょう。身体的特徴を侮辱されれば、誰だって怒りますよ」

「けどよお……」

反論しようとしたゲイルに、誰かが「おい」と声をかけた。

声の主を見ると、グレンが数人の若い男たちを連れて前に立っていた。総数五人。その全員が手にそれぞれ武器を持っていた。どう

やら見回りの帰りのようだ。

グレンは愛用の釘バットを肩に担ぎ、いかにも威嚇するような顔で立っている。その後ろに立つ他の連中は、サムの巨体見るのが初めてなのか、驚きを隠せていなかった。

「うちのじじいから話は聞いたぜ。あんたら、この村の用心棒になっただったって?」

「耳が早いな。ま、そういう事なんで、ガキは大人しく家の手伝いでもしてろ」

「何だとテムエ!」

「よせ。手を出すな」

ゲイルの挑発に腹を立てた若者を、グレンが片手を出して抑える。「今日は挨拶だけだがいいか、よおく覚えておけ。この村は俺たちの村だ。俺たちが守る。よそ者のあんたらはすっこんでな」

行くぞ、と他の連中に声をかけ、グレンは踵を返した。他の若者たちは、大将があっさり引き上げた事に不満顔だったが、すぐに彼の後を追った。

「何だありや? チンピラと大差ないな」

「若さゆえでしょう。温かく見守ってあげましょう」

「俺はあいつらの保護者か? 冗談じゃない。ガキのお守りなんてまっぴらご免だ」

ゲイルが肩をすくめてしていると、グレンが引き返して来た。何となくばつが悪そうな顔をしている。

「どうした。道に迷ったのか?」

「んなわけあるか! 言い忘れた事があっただよ」

そう言うとグレンは、咳払いを一つ挟む。言い難そうに目をきよるきよるさせたり、口をむにむに動かしたりと明らかに挙動不審だ。

「おい、用があるならさっさと見えよ」

「うつせえ。えつと……お前、その……昨日はサーシャの家に泊まっただよな……?」

「それがどうした?」

「お前……サーシャに何もしてねえだろうな？」

「……はあ？」

「サーシャに手え出したら、ぶっ殺すからな」

恥ずかしさを堪え精一杯強がる姿に、ゲイルは思わず吹き出した。

「ぶわっはっはっは。お前、あいつの事が好きなのか？」

「わ、笑うな！ それより、何もしてねえだろうな！」

「するか！ あんな貧乳、俺の趣味じゃねえよ。それに俺たちは納屋に寝泊りしてるから、余計な心配すんな」

「そうか……。ならいいんだ」

「しかし、ぶふっ……。お前がねえ。あいつを……」

全身の筋肉を隆起させて赤面しているグレンの姿に、ゲイルは再び笑いが込み上げる。

「あんな奴のどこがいいのか俺にはまったくもって解からないが、お前も面白い趣味してるぜ」

「うるさい！ とにかく話はそれだけだ。あと、この事はサーシヤには絶対言うなよ」

「へえへえ。解かったから、とっとと帰って釘バットの手入れでもしてる」

手をひらひらと振るゲイルに、グレンは何か言いたそうな素振りを見せるが、結局「チッ」と舌打ちを残して仲間の所に戻った。

「見てて微笑ましいほど青春してますね」

「だがあいつも苦労するぜ。なんたつて惚れた相手があいつだからな」

「そうでしょうか？ 彼女の器量なら彼を尻に敷いて上手く扱うでしょう」

「？ 胸の薄い女は幸も薄い？ って言うだろ」

「……その妄言は誰が言ったんですか？」

「俺だっ」

ゲイルは得意げに親指で自分を指差す。サムが呆れるのを通り越してフリーズしていると、ようやくご婦人方から解放されたサーシ

ヤが戻ってきた。

「やれやれ……お待たせ。ねえ、グレンと何を話してたの？」

「いや、大した話じゃない。それよりぼちぼち帰ろうぜ」

「腹が減ったって言いたいんでしょ？ もう、あんたってワンパターンのよ」

「いいものはいつまでも変わらないんだよ」

「馬鹿は死ななきゃ治らない、とも言っわね」

ゲイルとサーシャが額を突きつけあって睨み合っていると、突然サムが二人の頭を抑え込んだ。

「皆さん、伏せてください！」

直後、轟音とともに大地が波打った。人々は、いとも簡単に地面に投げ出される。

地震はさつきとは比べ物にならないほど強く、長く続いた。その間人々は悲鳴や叫び声を上げながら、ただ地面にしがみつく事しかできなかった。

天変地異かと思われるほどの揺れが治まると、ようやく人々の間に安堵の声が漏れ始めた。地面を転がって草まみれになった人。強く地面にしがみついていたために、顔や体中に泥がついた人。皆自分たちの現状を気にする余裕などなく、近くの者と無事を喜び合う事に夢中になっている。

「クソッ、さっき地震があつたばかりだつてのに、何だつてこんなに早く次が来るんだ！」

ゲイルが忌々しげに立ち上がると、服についた土がぱらぱらと落ちる。

「あれは前震です。恐らく、これまでにあつた地震もこれの前触れのようなものでしょう」

「つて事は余震もあるのか？ 冗談じゃないぜ」

「それより被害は？ ケガ人が出ているかも知れないじゃない！」

「ああもう、薬箱を持ってくれば良かった……」

「サム、余震がいつ来るか判るか？」

「データが少な過ぎて予測不可能です。先ほどは、一瞬早く足の裏のセンサーがP波をキャッチできましたが、直下型の地震だとそれも間に合いません」

「チッ、未開惑星はこれだから困る。せめて震源地くらいは特定できないのか？」

「それならば可能です」

サムが太い指で村の外を示す。

「火山か……。妥当過ぎる場所だぜ」

「震源地はあの火山の麓、地下千メートル以内でしょう。これ以上の精密な計測は、私のセンサーでは困難です」

「いや、それだけ判れば上等だ。噴火の兆候は無いな？」

「残念ながらそれもデータ不足です。ですが、火山内部には大し

た乱れを感じられません」

「断定はできないが、とりあえず今すぐ噴火するってわけじゃないんだな？」

「肯定です。ですが次にもっと大きな規模の地震が起これば、あるいは……」

「やれやれ……化け物の次は火山か。難儀な村だぜ」

ゲイルは頭を掻き毟る。二人が密談している間にも、サーシャは人々の間を走り回り、できる限りの治療を施している。幸いかすり傷程度のケガばかりで、重傷者はこの場にいなかった。耕地で土が軟らかいのが良かったのだろう。

「あたし、村の様子を見てくる！」

一通り治療を終えたサーシャは、居ても立ってもいられなくなり、居住区に向かつて駆け出す。だが彼女の向かうその先から、一人の若者が走ってきた。

「グレン？」

グレンは息を切らせ、サーシャの許へ駆け寄る。恐らく全速力でここまで走ってきたのだろう。汗を滝のように流し、息切れで何を言っているのか判らない。きつと「サーシャ、無事だったのか」とでも言っているのだろう。地震の際取り落としたのか、愛用の釘バツトは手にしていなかった。それよりも、まず彼女の許へ馳せ参じたのだろう。

「馬鹿！ 何であたしなんかを探し回ってるのよ。あんた自警団のリーダーでしょ？ こういう時こそしっかり仕事しなさいよ！」

「し、しかし……俺はお前が心配で……」

「子供じゃないんだから、いちいち心配しないでって言うてるでしょ！ それともあんた、あたしが独りでは何もできないって思ってるんじゃないでしょうね？」

サーシャの剣幕にグレンはたじろぐ。グレンは自分の愛が溢れる行動で、サーシャが感動して抱きついてくる妄想でもしていたのだろうか。だが現実は一蹴しく、むしろ彼女を激昂させている。

「彼、わかってませんね。色々」と

「幼馴染のくせに、まだあいつの性格が解かってねえのかよ……。見てて可哀相になってくるぜ」

「泣けますね。涙は出ませんが」

ゲイルとサムが二人のやり取りを見物していると、大変だという叫び声が聞こえた。見ると、居住区のほうから若い男が一人、こちらにやってくる。

「グレン、こんな所にいたのか！」

青年は一目散にグレンに駆け寄る。ここに走ってきた時のグレンよりも汗を流し、肩で息をしている。

「おい、どうした？」

青年の必死の形相に、グレンがただ事でない事を察する。喘ぐように何かを伝えようとする青年の肩を、グレンが乱暴に両手で掴んだ。

「大変だ。岩が……大岩の足元が地震で崩れ、今にも転がり落ちそうなんだ！」

「何だって……！」

大岩は、確かに頑丈な柵で囲まれていた。だが土台となる地面が崩れてしまつては元も子もない。あれだけ巨大な岩が村に転がり落ちたら、どれだけの被害がでるか予想もつかない。

「急いで行つてくれ。今他の連中が柵の補強に当たっている。俺はもつと人手を集めてくるから、グレンはみんなの指揮を頼んだぞ！」

「あ、おい……！」

青年はそう言うと、震える足を再び動かして走り出した。

「サーシャは万が一に備えて、村のみんなに避難するように伝えてくれ」

「わ、わかった……。あんたはどうするのよ？」

「俺はみんなを指揮しなきゃならない。それより早く、みんなにこの事を伝えるんだ」

サーシャは神妙に頷く。グレンは次に、ゲイルたちの方へ向き直った。

「あんたたちも手を貸してくれ。人手が足りないんだ」

「何で俺が手伝わなきゃならないんだよ？」

「何でもクソもあるか！ あんた村の用心棒だろ？ 村を守るのに手を貸してくれよ！」

「ゲイルお願い。みんなを手伝ってあげて」

二人はさすがのような顔で、ゲイルに頼み込む。だがゲイルはそ知らぬ顔をするだけだ。

「俺が頼まれたのは、化け物から村を守る事だけだ。岩は契約にない」

「何だとテメエ、屁理屈こねやがって。それでも人間か？」

非情な態度に、とうとうグレンが我慢の限界を超える。力任せに胸座を掴み上げるが、ゲイルの態度に変わりはない。

「そんな大人げない……。手伝ってあげましようよ」

相棒が提案しても、ゲイルは一向に首を縦に振らない。こうしている間にも、村の危機は刻一刻と迫っている。

「クソツ、もう頼まねえよ！」

とうとう痺れを切らし、グレンは掴んでいたゲイルの胸座を乱暴に離す。憎しみすら籠った一瞥をくると、大岩へと向かって走って行った。

「フン、人をあてにするな。自分の村くらい自分でまも」

乾いた音がゲイルの頬から鳴る。サーシャが力一杯ゲイルを叩いていた。

「何すんだよ？」

サーシャは無言だった。大きな目にいっぱい涙を浮かべ、悔しそうに歯を食いしばり、今にも泣き出しそうな顔でゲイルを睨んでいる。

「あんた……最っ低の人間だわ」

「だからどうした。俺は都合のいいヒーローじゃない」



「だから手を貸さないって言うの？ あんたって血も涙もない人ね」

「そんなもん、とつくの昔にねえよ」

「馬鹿っ！」と大声で言い残して、サーシャは居住区へと駆けていった。後に残されたのはゲイルと、相棒に無機質な視線を注ぐサムだけだ。

「……何だよ？ 言いたい事があるなら言えよ」

「余計な事に関わっている余裕などないことは、私だって解かっています。ですが困っている人を助けられるだけの力を持っているのに、どうしてそれを使わないのですか？ 他人を見捨てても、恋人を助けたいのですか？」

「……………」

「今の貴方を見たら、キャサリンは悲しむでしょうね……………」

言い終わるとサムは、ゲイルに背中を向ける。巨体を揺らし歩き出す相棒に、ゲイルは驚いて声をかけた。

「おい、どこへ行くんだよ？」

「彼らを手伝いに行きます。貴方はどうぞ、そこで日向ぼっこでもしててください」

「おいおい冗談だろ？ ちょっと待てよ！」

何度ゲイルが呼んでも、サムは振り返る事はなかった。やがて完全に見えなくなる。相棒に見捨てられたゲイルは、独り取り残された。

「クソッ、勝手にしろ！」

言いようのない苛立ちに、ゲイルは足元にあった石を思い切り蹴る。

石は、村の遙か外まで飛んで行って見えなくなった。

村の男たちは老若を問わず、今にも倒れそうな大岩を相手に奮闘していた。

ごっそりと沈下した岩の足元へ、次々と土が投げ込まれる。岩に綱をかけ数人で引っ張っているが、それもどれだけ効果があるか。それだけ巨大な岩が、今まさに村に向かって転がり落ちんとしている。誰もが死に物狂いになっていた。

綱を引く連中の中に、グレンの姿があった。掛け声をかけては指示を出し、指示を出しては掛け声をかける。彼の声に合わせて皆が綱を引くが、岩はびくともせずむしろ徐々に倒れようとしている。

「みんな頑張れ！　ここで踏ん張らなきゃ、俺たちの村がぺしゃんこになるんだぞ！」

喉が張り裂けんばかりに叫ぶグレン。皆もそれに応じて掛け声をかけ、綱を引く腕に力を込める。

彼らの手は擦り切れ、綱を赤く染めていた。それでも彼らは綱を引く手を緩めない。そうでないと自分たちの住む家が、家族が、生まれ故郷がどんな事になるか想像がつくからだ。その恐怖が、彼らに綱を引く力を与える。

男たちは必死で綱を引いた。だが無情にも岩はぐいぐいと男たちを引きずる。

もう駄目だ　誰もがそう思いかけた時、急に綱が軽くなった。岩が転がったかと思いきや、そうではなかった。

「あ、あんた、来てくれたのか！」

グレンが歓喜の声を上げる。

「今のうちに岩の下に土を詰めてください」

サムだ。サムは数本の綱を両手で持ち、二十メートルはゆうにある岩が倒れるのをびたりと止めていた。

サムは村の男たち全員を集めた以上の力で岩を引いてくれた。おかげで岩が倒れるのが止まり、このまま土を詰め込めば岩は安定するかと思われた。

だが

ばつん、という音がして、岩にかけていた綱が千切れる。一本が切れると、ばつんばつんと連鎖的に他の綱も切れ、遂に岩はもう止められないくらい傾いた。

「倒れるぞ。みんな逃げろおっ！」

グレンの叫び声に、岩の前で土を盛っていた男たちが一斉に逃げ出す。蜘蛛の子を散らすように男たちが逃げると、岩が倒れて柵を打ち壊した。

ばらばらになった柵の破片が辺りに飛ぶ。逃げた男たちは、悲鳴を上げながらそれらからも逃げる。頭を抱えて逃げ惑う男のすぐ側に丸太が突き刺さった。

巨岩が丘を転がり始め、男たちの顔に絶望が浮かぶ。家族はもう避難しただろうか。せめて自分の家を避けて転がってくれ。様々な想いや願いが浮かんだが、口から出たのは「もうおしまいだ」という言葉だった。

だがグレンは見た。転がる岩の前に立つ男を。そんな馬鹿な。馬鹿があいつは。馬鹿だろう。男は逃げも恐れもせず、仏頂面で立っていた。

「何やってんだ！ 早く逃げろ！」

グレンは叫ぶ。だが男はまるで聞いちゃいない。拳を握り、まるでその拳で岩を砕かんとはかりに構える。

「馬鹿野郎！ 無茶だ。やめろ！」

男はグレンの声に、初めて反応した。

「馬鹿だと？ 誰に向かって言ってるやがる」

「お前だよお前。死にたいのか！」

「フン、この程度で死にゃあしねえよ。それよりこいつはサーピスだ。釣りはいらねえから取っとけよ！」

男はにやりと笑うと、大岩に自ら向かって行った。

「砕けるおおおおおおおっ！」

気合とともに、男が岩に拳を打ち込む。

火山が噴火したような轟音に、一瞬岩が破壊された錯覚する。だがみな男が岩の下敷きになったと確信していた。

「な……何い……」

誰かが驚きの声を漏らす。

「嘘だ、ろ……？」

信じられないものを見た。そんな顔がずらりと並んでいた。あの大岩が、ぴたりと止まっている。そんなはずがあるわけがない。

「かつてえ……。さすがにこれだけデカいと一発じゃぶっ壊せねえな」

岩の陰から男の声が聞こえる。幻聴　否、それは明らかにあの男の声。

踏み込んだ足は膝まで埋まり、打ち込んだ拳は肩まで岩に突き刺さっている。だがそれでも岩は砕けない。膨大な重量が男にかかり、足がさらに埋まる。このままでは、男が岩に押し潰されるは明らかだ。

「サム、ぼくと見てないで手伝え！」

男が声をかけると、丘の上から銀の鎧を身にまとった、三メートルの巨体が現れた。

鎧が男の姿を認めた時、鉄仮面から空気が漏れる。それはゲイルがいつもやる「フン」という鼻で笑うような空気の音だった。

「やはり来てくれましたか、ゲイル」

「フン、別に気が咎めたから来たんじゃないやねえぞ。村がぶっ壊れたら、美味しいメシが食えなくなるから来たただけだからな！」

「素直じゃないですね。実に貴方らしい」

「う、うるせえ！　無駄口叩いてないで、さっさとこっち来い。二人でやるぞ！」

「了解しました」

相棒の許へ駆け出すサム。仮面のような顔は、嬉しそうに笑っているようだ。

巨体とは思えない速度で、サムは丘を下る。

「サム、岩の固有振動数をサーチ。次に岩の中核を割り出せ！」

「了解」

走りながら、サムは命令を実行する。

「終了。目標の固有振動数、及び中核座標を共有」

ゲイルは岩から腕を抜くと、体全体を使って岩を受け止める。岩に抱きついた瞬間、足が太ももまで地面に埋まる。

すぐさまサムがゲイルの反対側から岩に抱きつき、二人で岩を挟みこむ。

「どおおおおおりゃああああっ！」

ゲイルの掛け声とともに、二人が全身の力を込める。サムの足も膝まで埋まった。二人がさらに力を込めると、巨大な岩がゆっくりと地面から浮き上がった。

どよめきが起こる。村の男たちが総出でも動かせなかった大岩を、たった二人で持ち上げたのだ。男たちは我を忘れ、異様な光景に見入った。

「では始めましょう」

「応よ」

次の瞬間、大岩が空高く放り上げられる。舞い上がった岩は、小石ほどの大きさに見えるほど高く投げられた。

続いて二人は両腕を胸の高さに掲げ、上下左右に振り始めた。

ぶらぶらと大きく振っていた腕の動きが次第に小さく細かくなり、ぶつんと虫の羽音のような音が腕から聞こえた。

音はどんどん大きくなり、人々は羽虫の大群が現れたかのような騒音に耳を塞ぐ。音が大きくなるに比例して腕の振りが治まってきた、やがて完全に止まった。いや、止まったように見えるだけで、二人の腕は高速で振動していた。腕の振動が空気を震わせ、虫の羽

音のような音を生み出しているのだ。

「行くぞ、サム。遅れるなよ！」

「ご冗談を。一万分の一秒の誤差もなく合わせてみせますよ」  
相棒の自信満々の返事に、ゲイルは不敵な笑みを漏らす。

「上等。それでこそ俺の相棒だ」

二人は頷きあうと一斉に飛び上がった。一気に上空の岩まで追いつくと、対照的に構える。ゲイルは両手を開いて腰に当て、サムは両手を開いて肩の高さで。

「必殺、超振動挟撃！」  
ハイブレーションプレス

ゲイルが叫ぶのと、二人が両手を岩に打ち込むのは同時だった。サムの宣言通り、一万分の一秒の誤差もない。まさに完璧と言っているほど同時に、二人の両手は大岩に叩き込まれた。

二人が放った衝撃波は、正確に岩の中心で重なった。二方向からの波動は確実に岩の芯を捉え、混ざり合って増幅され岩全体に広がる。

二人が両手を岩から離すと落下が始まった。落ちる二人と巨岩。このまま落下すれば、二人が無事で済まないどころか、再び岩が転がって村が大惨事になるだろう。

「お、落ちてくるぞおおおおっ！」

人々が悲鳴を上げて逃げ惑う。だが彼らの上に、岩は落ちてこなかった。

軽やかに降り立つゲイルと、地響きを上げて着地するサム。それだけだ。頭を抱えてうずくまっていた人々が顔を上げると、顔や頭に小石が当たる。それは、粉々に砕けた岩の破片だった。跡形も無く砕けた岩は、小石や砂となって雨のように降り注いだ。

魔法のように岩が消えた。そうではない。彼らが岩を粉微塵にしたのだ。そう人々が理解した時、口々に歓喜の声を上げ始めた。

「うおおおおおっ！ や、やりやがったあああああっ！」

「助かった。村が……村が助かったんだ！」

「すげえっ！ すげえよ、あんたたち！」

「一週間だなんてとんでもねえ。あんたたち、ずっとこの村に残  
つてくれよ！」

人々が駆け寄り、ゲイルとサムを取り囲む。その時誰かがグレン  
とぶつかって、彼は尻餅をついた。

ゲイルの肩に腕を回す者。サムの上に抱きつく者。両手を振り上  
げて、体で喜びを表す者。感極まって泣き出す者。男たちは、これ  
以上ないほどの感謝と賛辞を二人に注いだ。ただ一人、グレンだけ  
が放心したように固まっていた。

「どうですゲイル。たまには自ら人助けをするのも悪くないでし  
ょう？」

「フン……男に感謝されても嬉しくとも何ともねえよ」

親指で鼻をこすり、ゲイルは唇を尖らせる。だがすぐに唇の端が  
持ち上がり、照れ臭いような、それでいて喜ぶ彼らを見て嬉しいよ  
うな笑みを作る。

「ですが」

男たちはまだ騒いでいる。とんでもないものを見た興奮と、村の  
危機が去った喜びが、彼らを子供のようにはしゃがせていた。

「別に砕かなくても、あのまま岩を村の外に放り投げたら良かつ  
たのではないでしょうか？」

「あ……………」

あれだけ騒いでいた男たちが、ぴたりと静まる。祭りの如き狂乱  
が、サムの何気ない一言で完全に止まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8222y/>

---

特務捜査官ゲイル&サム～俺たちは英雄じゃない

2011年12月11日13時47分発行